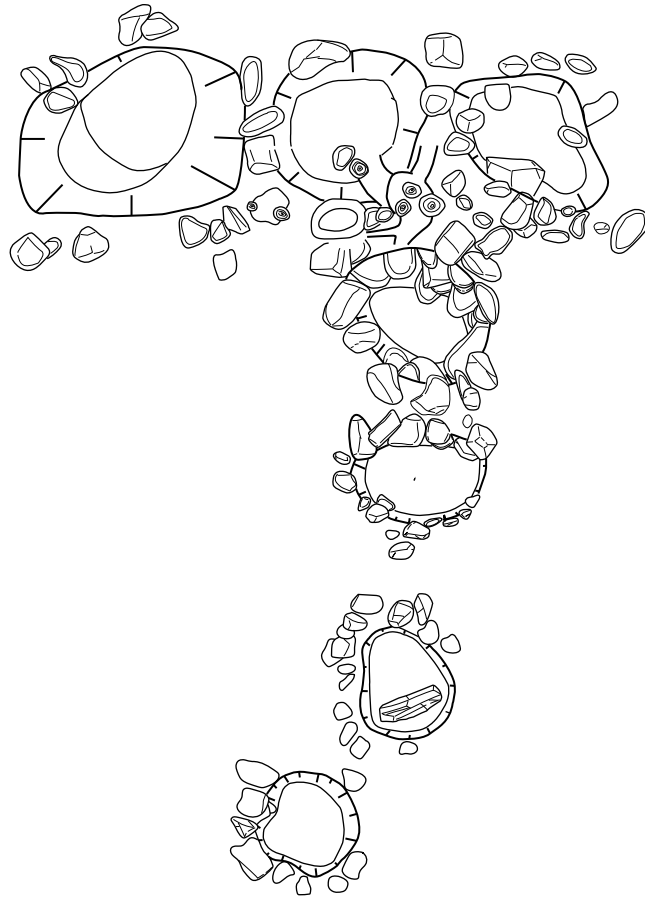


朝来経塚群発掘調査報告書

－和歌山県上富田町における経塚・古墳の調査－



2024年3月

奈良大学文学部文化財学科

朝来経塚群発掘調査報告書

—和歌山県上富田町における経塚・古墳の調査—

2024年3月

奈良大学文学部文化財学科

はじめに

1985年、水野正好先生は学生たちと共に、和歌山県上富田町にある朝来経塚の発掘調査を行いました。当時、希有であった経塚の調査で、合わせて和歌山県最古級の前方後円墳の確認などの大きな成果をあげました。この概要は、『上富田町史』に掲載されたものの、詳細な報告がないままでした。

長らく出土遺物と調査資料を奈良大学で保管していましたが、経塚を研究する学生から資料整理の提案がありました。水野先生の教えを受けた相原が本校に着任したこともあり、再整理と報告書の作成を計画しました。再整理にあたっては、現在の調査精度からみると不備な点も見られたものの、40年ちかく前の調査方法・体制では仕方のない部分でもあります。また、調査成果の再検討を行う中で、当時とは異なる新たな見解も出てきました。これも考古学研究の進歩であります。

この報告書が、上富田町のみならず、和歌山県の歴史の解明と、文化財保護の一役を担えることができれば幸いです。

奈良大学文学部文化財学科 相原 嘉之

例 言

1. 本書は和歌山県西牟婁郡上富田町朝来 1061 ほか（愛宕山）に所在する朝来^{あつそ}経塚群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、上富田町史編纂に伴い上富田町史編纂委員会と奈良大学考古学研究室によって 1985 年（昭和 60）7 月 20 日～30 日まで実施した。本書の作成にあたっては、2022 年度（令和 4）～2023 年度（令和 5）に、上富田町教育委員会の協力を得て、奈良大学文学部文化財学科において出土品・図面類の再整理を行った。再整理に伴って 2023 年（令和 5）3 月 15 日～17 日の期間に現地での補足調査を実施した。
3. 上富田町史編纂に伴う調査および補足調査、再整理の参加者は第 2 章に記す。写真撮影は、橋本侑大、森山そらの、米津貴史が行い、一部町史編纂に伴う調査の写真を使用した。実測図・図版の作成は整理作業参加者が担当した。
4. 報告書作成にあたって、下記の機関及び個人より御援助を受けた。
上富田町教育委員会、圓鏡寺
岩橋幸大、魚島純一、大河内智之、大谷逸人、河内一浩、小林青樹、狭川真一、杉山智昭、善端直、寺前欣則、豊島直博、野口哲也、三浦基、宮内一裕（敬称略・五十音順）
5. 本書のレベル高は任意の基準点による標高で、海拔高ではない。方位は磁北である。
6. 本書の執筆は、相原嘉之、橋本侑大、森山そらの、後藤弘一朗、松田青空、植木実果子、則包遥菜が分担し、相原がこれを監修した。分担は目次および執筆箇所の末尾に示した。編集は橋本が担当した。
7. 再整理にあたっては、一部の調査資料の散逸や当時の発掘調査を知る方々が少ないこともあり、詳細が不明な点もあった。現時点で残されている資料と補足調査を基に、本報告書を作成した。やはり早期に報告書を作成する必要性を痛感している。
8. 出土遺物及び関係書類・図面等は上富田町にて保管している。

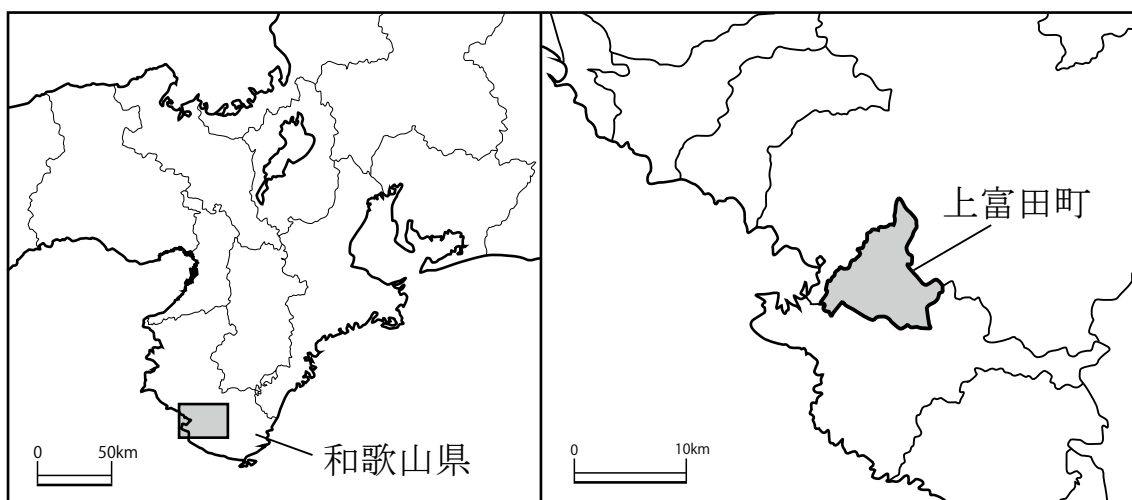
朝来経塚群発掘調査報告書

目次

はじめに

例言

第1章	地理的・歴史的環境	1
第1節	地理的環境	橋本侑大… 1
第2節	歴史的環境	橋本… 1
第2章	調査の経緯と経過	4
第1節	町史編纂に伴う調査	後藤弘一朗… 4
第2節	補足調査	後藤… 4
第3章	調査の成果	9
第1節	朝来古墳	則包遙菜・相原嘉之… 9
第2節	朝来経塚群	橋本… 14
第3節	一字一石経塚	橋本・植木実果子・松田青空… 18
第4章	出土遺物	22
第1節	東播系須恵器	橋本… 22
第2節	常滑焼	森山そらの… 23
第3節	一字一石経	橋本… 29
第5章	総括	橋本… 35



上富田町の位置

図 版 目 次

- 図版 1 朝来経塚群遠望
朝来経塚群円丘上遺構（南から）
- 図版 2 発掘調査前の経塚群（東から） 円丘上の発掘状況（北から）
経塚群完掘状況（南から） 4～7号経塚（南から）
1号経塚（東から） 4号経塚（南から）
6号経塚（南から） 一字一石経散布状況（南から）
- 図版 3 東播系須恵器甕（1）
- 図版 4 東播系須恵器甕（2）・常滑焼大甕
- 図版 5 一字一石経（1）
- 図版 6 一字一石経（2）

挿 図 目 次

上富田町の位置

- 図 1 上富田町内の主要遺跡分布図
- 図 2 朝来経塚群位置図（1：5000）
- 図 3 朝来古墳測量図（1：100）
- 図 4 円丘上遺構配置図（1：100）
- 図 5 調査風景
- 図 6 朝来古墳 前方後円墳復元図（1：200）
- 図 7 朝来古墳 円墳復元図（1：200）
- 図 8 円丘上遺構図（1：40）
- 図 9 圓鏡寺の石塔
- 図10 東播系須恵器甕実測図①（1：3）
- 図11 東播系須恵器甕実測図②（1：3）
- 図12 東播系須恵器甕実測図③（1：3）
- 図13 常滑焼実測図（1：3）
- 図14 一字一石経実測図①（1：2）
- 図15 一字一石経実測図②（1：2）
- 図16 一字一石経赤外線撮影①
- 図17 一字一石経赤外線撮影②

表 目 次

- 表 1 出土遺物観察表（1）
- 表 2 出土遺物観察表（2）
- 表 3 一字一石経観察表

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

朝来経塚群は、和歌山県西牟婁郡上富田町朝来に位置する。上富田町は和歌山県南西部に位置しており、概ね北と西を田辺市、南と東は白浜町に接している。町の面積は57.37 km²で、町内の約63%を森林が占める。平均気温が約17°Cで、比較的温暖な気候である。

町の中央には、下鮎川から岩崎に富田川が貫流している。富田川は、この地域ではかつて岩田川とも呼ばれており、源流を果無山脈の安堵山にもち、田辺市から上富田町を経て、白浜町富田付近で太平洋に注ぐ二級河川である。朝来経塚群の所在する朝来地域は富田川を隔てて町内の北側に位置する。富田川流域の環境として、上流域は山林が多数を占めるが、上富田町内の下鮎川や市ノ瀬に平地が現れる。そして岩田を経て、さらに下流の朝来、生馬、岩崎の平地へと続いていく。

また、本遺跡が所在する朝来地区は町内の西に位置し、河川、古道、山が揃う周囲が栄える条件にあった。こうしたことから、この場所が古くからの交通や政治上の要所であったといえるであろう。

第2節 歴史的環境

上富田町には、熊野信仰に伴う複数の王子が存在するなど、歴史的に重要な土地である。以下では、上富田町の歴史的環境について主要な遺跡を中心に述べる（図1）。

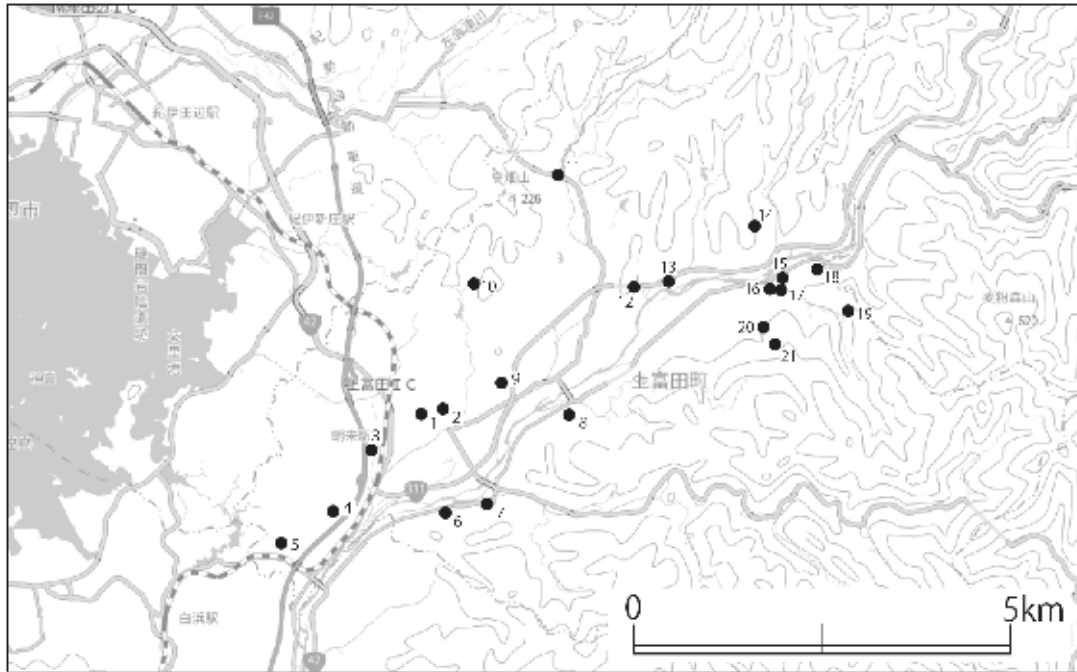
縄文時代 上富田町における最古の生活痕跡は、縄文時代後期の平見遺跡で宮滝式土器や石器などが確認されている。また、後期・晩期に属する市ノ瀬遺跡では突帯文土器などが確認されている（上富田町史編さん委員会1992、和歌山県文化財研究会1987）。

弥生時代 弥生時代には、市ノ瀬遺跡で弥生土器の壺、坂本付城跡でも壺や甕が確認されており、朝来からも銅鐸が出土している（上富田町教育委員会2021、上富田町町史編さん委員会1992）。

古墳時代 上富田町の遺跡からは、古墳時代前期からの土器が散見される。町内に築造された古墳として、山王古墳、岩田古墳群が存在する。5世紀に造営された山王古墳群は2基の円墳で構成され、2基の箱式石棺が確認されている。岩田古墳群は6世紀に造営されたと考えられ、前方後円墳2基と円墳2基が確認されている。このほかに朝来古墳の存在も知られているが、詳細は不明である（上富田町教育委員会・奈良大学考古学研究室1985、上富田町史編さん委員会1992）。

古代・中世 古代の資料は少なく、岩崎大泓遺跡で墨書をもつ土器が確認されるが、多くは散布地である。中世には、熊野信仰の要所である九十九王子のうち、八上王子跡、稲葉根王子跡、一瀬王子跡の3カ所が町内に所在する。この3カ所の王子のなかでも、稲葉根王子は五体王子に数えられる要所である。以降の上富田町には、龍松山城跡、国陣山城跡、釣堀山城跡、塗屋城跡など多数の城館が造られた（上富田町教育委員会2021）。

近世 近世に入ると上富田町には多数の礫石経塚が現れる。町内には、11基の礫石経塚が確認されている。その所在は、朝来経塚群（2基）、興禅寺経塚（3基）、興禅寺境内（1基）、



地理院タイル（ベクトルタイル）を加工して作成

1. 朝来経塚 2. 圓鏡寺 3. 塗屋城跡 4. 岩崎大泓遺跡 5. 朝来銅鐸出土地 6. 山王古墳群
7. 平見遺跡 8. 釣堀山城跡 9. 岩田古墳群 10. 救馬溪観音経塚 11. 八上王子跡 12. 国陣山城跡
13. 稲葉根王子跡 14. 龍松山城跡 15. 市ノ瀬遺跡 16. 坂本付城跡 17. 門垣（市ノ瀬）経塚
18. 一瀬王子跡 19. 市ノ瀬清水塚ノ尾 経塚 20. 興禅寺経塚 21. 行者山経塚

図1 上富田町内の主要遺跡分布図

行者山経塚（2基）、門垣（市ノ瀬）経塚（1基）、救馬溪観音経塚（1基）、清水塚ノ尾経塚（1基）である。その多くが玉置氏によって造営された経塚である。上富田町内の経塚について、『上富田町史 史料編下』を参考として各礎石経塚の概要について記載する（三浦 1992a、1992b）。

興禅寺経塚 興禅寺境内には、3基の経塚が造営されている。1基目は、玉置家墓所に経碑が建てられている経塚である。唐破風付き笠付型の経碑から玉置正親によって、元文2年銘（1737）に造営されたことがわかる。大乘妙典経全3部を1石に3字を書写した多字一石経塚である。

また、玉置正親の子、玉置義知によって2基の経塚が造営されている。1基目は、177cm × 88.5cmの蓋石をもつ石室内に約7万点の経石が確認されている。確認されている経石は、1石に同一の文字を二字書写したものであり、経碑は宝篋印塔である。2基目は、歴代住職墓所に所在する宝塔を経碑とする経塚である。この他に、興禅寺知足庵須弥壇下に保管されていた経石がある。上富田町史では、3基とされたが、2号経塚と3号経塚は同一である可能性が指摘されていた（三浦 1992a）。

興禅寺境内 興禅寺墓地内の三栖家墓地にも1基の経塚が存在する。角柱の経碑をもち、寛政12年（1800）の造営であり、1石に6文字を書写している（三浦 1992a）。

行者山経塚 興禅寺の裏山に位置する行者山に玉置義知造営の1号経塚、その子である玉置義忠による2号経塚が造営されている。1号経塚は、観音菩薩坐像を経碑として安永8年（1779）に造営された。経碑から書写された大般若理趣分経は、1石に2字を記したことがわかる。2号

経塚は、阿弥陀如来坐像を経碑として安永10年(1781)に造営された1石に2文字を書写している。両経塚ともに、多字一石経塚である(三浦1992b)。

門垣(市ノ瀬)経塚 市ノ瀬両平野共同墓地内に所在する。2022年に石塔が事故によって失ったものの一字一石経であることが確認された。本来存在した経碑には、宝暦2年(1752)に造営されたことが記されていた(三浦1992b)。

救馬溪観音経塚 救馬溪観音の境内に所在し、経碑は自然石を用いている。経碑の銘文からは、宝暦9年(1759)の造営であることが窺える。

清水塚ノ尾経塚 経碑の銘文から天保6年(1835)に造営された、一字一石経塚であることが窺える。書写された経典は、大乘妙典経である(三浦1992b)。

これらのほかに、圓鏡寺境内にも明治21年の銘をもつ経碑が存在する。

ここまで上富田町の歴史的環境について、その概要を通観した。町内には中世に複数の王子が所在し、近世においても多数の礫石経塚が集中して所在するなど宗教的要所といえる地域である。

(橋本侑大)

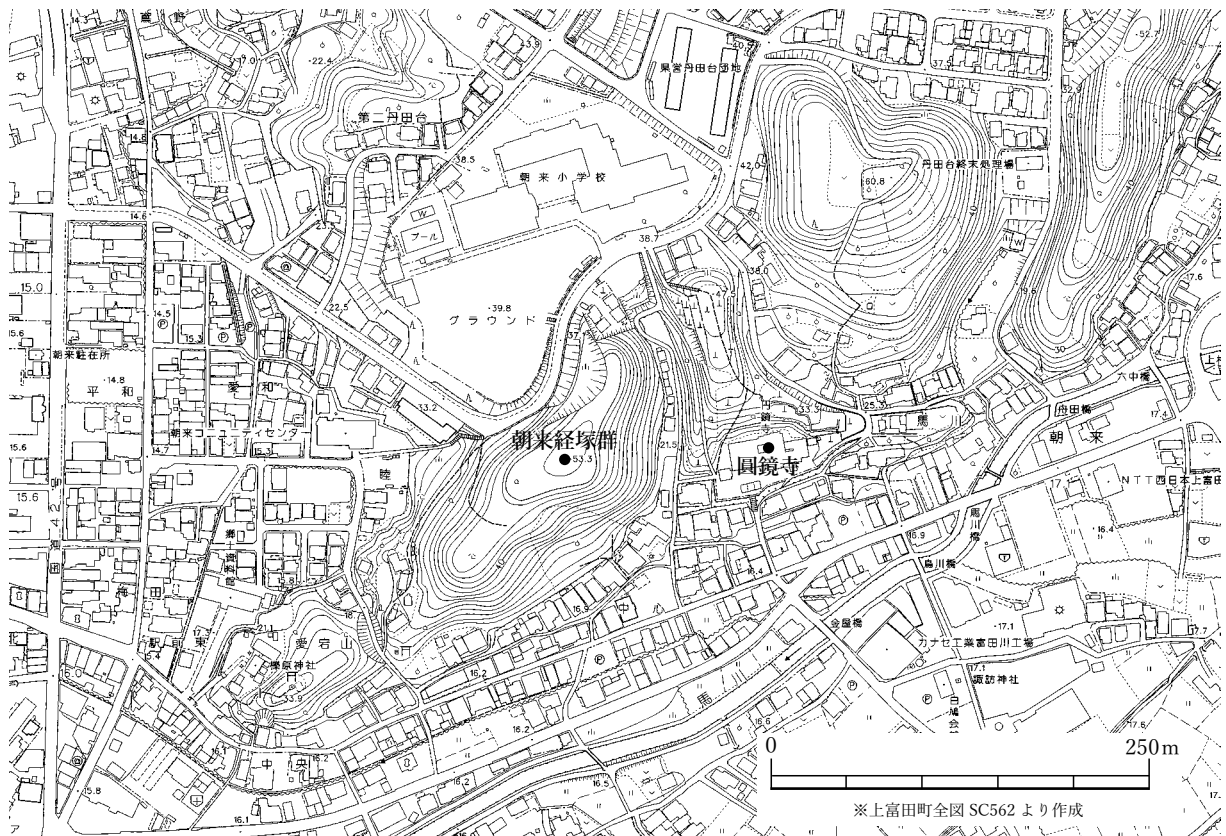


図2 朝来経塚群位置図(1:5000)

第2章 調査の経緯と経過

第1節 町史編纂に伴う調査

発掘調査を実施した朝来経塚群は、和歌山県西牟婁郡上富田町朝来 1061 ほかに所在し、上富田町史編纂に伴う調査において朝来古墳、7基の石組墓、2基の経塚からなる複合遺跡であるとされている。本遺跡は、1971年（昭和46）4月に朝来小学校の南の丘頂上で「舎」・「迷」と記された一字一石経が採集されたことにより、その存在が認知された。それに伴い上富田町史編纂委員会が奈良大学の協力を得て、町史編纂事業の一つとして1985年（昭和60）7月20日から30日の期間で発掘調査を実施した。

発掘調査に先立って樹木を伐採したところ、古墳状の隆起を確認したことから、地形測量を実施した（図3）。その結果、丘陵が北に細長く伸び、先端部に張り出しを有する前方後円墳の存在が推測された。調査を行った水野正好氏（当時・奈良大学教授）は、広く上富田町域を眺めることができるこの場所に全長30mの前方後円墳が4世紀代に築かれたとし、大和朝廷と深くつながりがある勢力者の墳墓であると言及した（水野1992）。

発掘調査では、朝来古墳の後円部に7基の石組墓と2基の一字一石経塚が存在するとされた（図4）。遺物は常滑焼甕片、東播系須恵器甕片、一字一石経であり、甕片はいずれも蔵骨器に使用されたものと想定された。遺物と遺構の検討から朝来古墳の後円部上は、墓地などとして使用されたようで、14世紀初め頃の蔵骨器が確認されており、以降18世紀代の2基の一字一石経塚まで定期的に墓地などが造営されていたことが発掘調査により判明したと公表された。これらの発掘調査の成果は、『上富田町史 史料編下』において概要が報告されている（水野1992）。

第2節 補足調査

上富田町では、1979年（昭和54）に上富田町史編纂委員会を設置した。1992年（平成4）の町史発行まで、史料の収集及び、調査研究に従事してきた。その事業に伴う1985年（昭和60）の朝来経塚群（一字一石経塚）の調査により、朝来古墳・石組墓・経塚（一字一石経塚）として、上富田町史において報告され、朝来小学校の南の丘が長く使用されてきた複合遺跡であることが知られることとなった。しかし、1985年（昭和60）の発掘調査では石組墓・経塚（一字一石経塚）とされた遺構の検出に留まり、古墳の調査には至らなかったことから、朝来古墳の裏付けとなる古墳時代の遺構・遺物も検出されていない。さらに、調査において検出した遺構の記録、遺物に関しても町史に記載された概要に留まり、朝来経塚群の正式な報告書が未だ刊行されていなかったことから、2022年（令和4）より上富田町教育委員会の協力を得て、奈良大学において朝来経塚群の再整理を行うこととなった（図5）。報告書刊行に伴う再整理作業時には、町史編纂時の遺構解釈についても再検討を行った。

再整理に伴う現地での補足調査は、2023年（令和5）3月15日から17日の期間に実施し、朝来経塚群の地理的な環境を確認するための踏査、朝来古墳の存在が言及された測量図の基準線の確認、遺物の表採、記録写真の撮影、山麓の圓鏡寺に移設される廻国塔・六十六部廻国宝篋印塔の実測・拓本作業を行った。

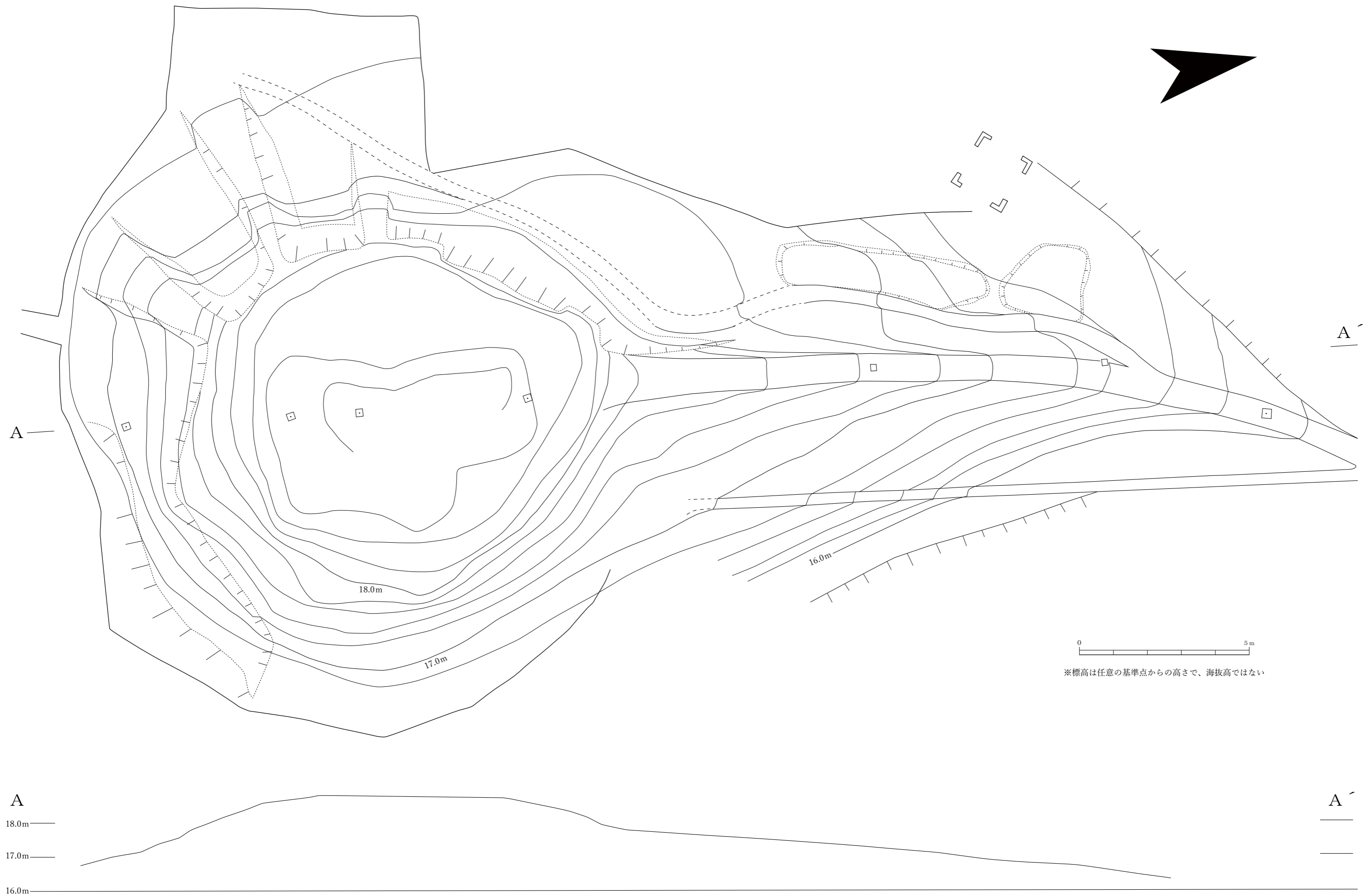


図3 朝来古墳 測量図 (1:100)

この調査によって、一字一石経塚の所在する円丘上の表土に露出する経石が確認でき、また新たな知見として朝来古墳の後円部裾・前方部に石敷きを確認した。遺物は東播系須恵器3点、常滑焼甕片1点を表採し、1985年（昭和60）の調査により示された遺構の再確認をすることができた。朝来古墳においては、地形の観察により前方後円墳の復元の検討を行ったが、古墳の確証となる遺物、痕跡は確認できず、朝来古墳の詳細は不明のままとなった。地形観察による朝来古墳の復元の詳細、石組み遺構の再検討は第3章において報告する。

調査・再整理作業参加者

1985年度（所属は当時） 水野正好（奈良大学教授）、野口哲也（文学部3年）、善端直（文学部2年）、伊勢田美和、加藤由美

2022年度（所属は当時） 相原嘉之、杉山智昭（以上、奈良大学准教授）、垣内翼（大学院修士2年）、橋本侑大（大学院修士1年）、瀬部和宏（以上、文学部4年）、後藤弘一朗、篠原志織、松田青空、渡邊廉（以上、文学部3年）、植木実果子、則包遥菜（以上、文学部2年）、上野弘樹、山本美空（以上、文学部1年）

2023年度 相原嘉之（奈良大学准教授）、橋本侑大（大学院修士2年）、森山そらの（大学院修士1年）、上野喜則、行天就要、後藤弘一朗、松木研太、松田青空（以上、文学部4年）、植木実果子、則包遥菜（以上、文学部3年）、上野弘樹、小田真由佳、西谷漸、山本美空、米津貴史（以上、文学部2年）、村松明日翔（文学部1年）

（後藤弘一朗）

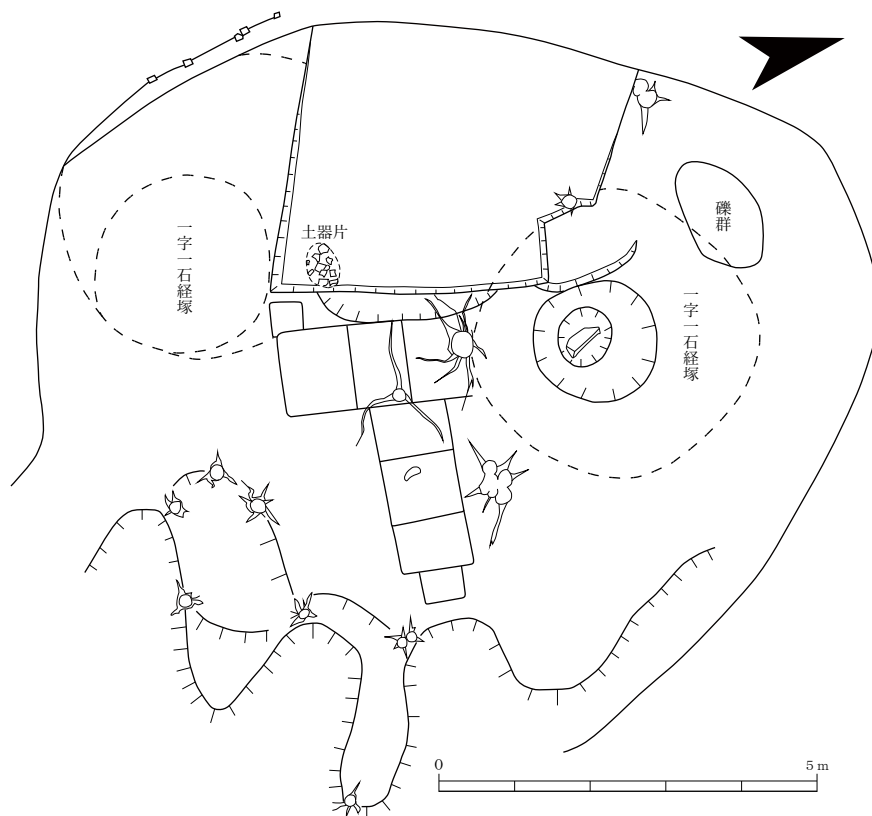


図4 円丘上遺構配置図（1：100）



町史編纂時の調査（朝来古墳・北から）



町史編纂時の調査（伐採後・西から）



町史編纂時の調査（円丘上・北から）



現地補足調査風景



現地補足調査（調査前・南西から）



現地補足調査風景（調査中・西から）



現地補足調査風景（調査中・南から）



再整理作業風景

図5 調査風景

第3章 調査の成果

第1節 朝来古墳

(1) 測量調査の概要

この調査は朝来経塚群の解明が目的であったため、まずは丘陵頂上部及び、その北側の尾根上を中心に、約 550 m²の範囲の樹木を伐採した。その結果、円丘状の高まり（以下、「円丘部」と呼ぶ）とこれに取り付く北側の里道（以下、「里道部」と呼ぶ）を確認したことから、古墳の可能性を考慮して、発掘調査前に平板による測量調査を実施した。等高線は 20 cm 間隔で、調査区内に任意の基準点を設置して実施した。

円丘部の最高所は、上富田町全図（S C 562）によると、海拔 53.3 m にあたる。円丘部の南部及び西部は近世の掘り込みによって破壊されているが、直径約 15 m のほぼ円形を呈しており、円丘部北側に里道部がとりつく。円丘頂部は、北西部がやや崩れているが、標高 18.2 m（以下、標高と示す場合は、任意基準点からの数値で、海拔高ではない）のラインで東西 10 m、南北 11 m のほぼ円形にゆるやかな平坦面が広がっている。標高 18.2 m あたりを境に、その下方は傾斜がきつくなり、円丘東部では、標高 17.0 m の傾斜変換点からさらに急斜面となる。円丘南部では、標高 17.4 ~ 17.8 m で、急な落ち込みとなって、標高 16.8 ~ 17.2 m あたりに平坦面があり、標高 16.8 m から急斜面で下がっていく。この斜面は、東部の 17.0 m から急斜面に続くものである。南西部から西部にかけては、墳丘部裾に長さ 5 ~ 6 m、幅 2.5 ~ 3 m の方形の掘り込みが 2 箇所ある。墳丘裾の傾斜部にあたるため、結果的にはコ字形の掘り込みとなる。掘り込みの上面は、標高 18.2 m から掘られており、底面の標高は 16.8 ~ 17.4 m である。ふたつの掘り込みの間が、土橋のスロープ状となっている。円丘南部の落ち込みとの間にもスロープができており、南側落ち込みも同様の掘り込みとみられる。さらに北西部の崩れた場所との間にもスロープがあり、北西部の崩れも、一連の掘り込みと考えられる。よって、円丘南部から西部にかけて、少なくとも 4 箇所の掘り込みが掘削され、その間にあたるスロープは 3 箇所に確認される。このスロープ上には 3 ~ 5 cm 程度の川原石のバラスが、比較的良好に残されていた。このような川原石は円丘南部の落ち込みの上方斜面にもみられる。これら一連の掘り込みは、圓鏡寺境内に移されている「寛政二年墓碑」「文政六年墓碑」がここに建てられていたという（水野 1992）。

この南部から西部にかけては円丘部裾が標高 17.0 m となっており、そこから西に 7 m までは、平坦面が続く。円丘部北西の崩れ箇所の北西に、標高 17.2 m の東西 3.5 m、南北 7 m 程の平坦面がみられるが、これは円丘部北西の崩れの土砂が堆積しているものであろう。このことから、円丘部の高さは平坦面から 2 m になる。

一方、里道部は、円丘部の北端に接続する形で、幅 80 cm の里道が北へ 15 m 程直線的に続き、そこから尾根筋にそって北北東に方向をかえる。この里道上にも、3 ~ 5 cm 程度の川原石の散布がみられ、里道両側には流れたものであろうか、川原石が散乱している。この里道の屈曲点の標高は 16.6 m で、ここでもうひとつの里道と合流する。この合流する西側の里道は、やや蛇行しながらも、円丘部の西裾を回り込むようになっている。

里道部が円丘部に取り付く所の標高は 17.8 m である。この地点と円丘部最高所の比高差は約 1 m 余がある。円丘部との取り付け部の里道両側は、なだらかに尾根に繋がっており、違和感

ない。里道は尾根の稜線上にあり、かまぼこ状に盛り上がる。里道の東側は、1 mほど平坦ではあるが、急斜面で下っていく。一方、里道西側は、標高 16.4 mあたりで里道から 10 mほど平坦面が続く。この平坦面は、円丘部西側に広がる平坦面に繋がる。なお、この平坦面の北部に、1.8 m四方の鉄塔が設置されている。

尾根上の里道は、さらに 50 mほど稜線上に伸びている。途中で地形にあわせて、再び北へと屈曲しながらのびるが、現在は小学校や住宅建設によって尾根は削られており、それ以上は確認できない。しかし、旧地形図をみると、尾根はさらに小学校方面へと伸びており、小学校の所で圓鏡寺の尾根と繋がっていたことがわかる。この里道の上面にもバラスが所々で敷かれているのを確認している。

(2) 古墳の認識

朝来経塚群の調査に伴って周辺の樹木を伐採した結果、地形を詳細に観察することができた。円丘状の高まりと、これに取り付く尾根稜線上には里道があり、先の円丘部と里道部を一連の遺構である可能性を認識したのは、調査担当者であった水野正好氏である。さらに周辺の地形測量を踏まえて、全長 30 mの前方後円墳と推定し、その形状から 4 世紀中頃の古式の古墳であると発表、「朝来古墳」と命名した。この成果を報道発表¹⁾すると共に、講演会「紀南の古代を語る」(水野 1985) で町民向けに報告され、『上富田の文化財』(上富田町教育委員会 1988)²⁾・『上富田町史 史料編下』(水野 1992) にその概要が掲載されている。

しかし、古墳そのものの発掘調査が実施されていないことから、朝来古墳の詳細については不明なまま、その意義づけがなされないことが続いた。よって、実態の不明な古墳とされて、和歌山県内の前方後円墳からも漏れ落ちていくことになる。現在、和歌山県教育委員会が公開する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(2023 年 5 月現在) では、前方後円墳ではなく円墳として登録されている。

このように朝来古墳は、前方後円墳として報告されたが、実態が不明なため、十分な位置づけはされてこなかった。

(3) 朝来古墳をめぐる諸問題

朝来古墳については、先に記したように、その評価が定まらない。その要因は、測量図から古式の前方後円墳を復元したものの、出土遺物もなく、時代を特定できないこと、埋葬施設が不明なこと、墳丘の様子も地形測量以外に情報がないことに起因する。そこで、「朝来古墳」の課題となる、前方後円墳の再検討及び、他の可能性についても検討し、今後の研究につなげたい。

A. 前方後円墳

本遺跡を前方後円墳と認識したのは、水野正好氏である。水野氏は樹木伐採後の地形を観察した結果、前方後円墳の可能性を考え、測量調査の成果を踏まえて、前方後円墳と理解した。前方後円墳の根拠としては、直径 15 m、テラス平坦面から 2 mにも及ぶ背の高い円丘部をもつこと、この円丘部の北にある里道が、円丘部に取り付くことから、全長 30 mの前方後円墳に復元した(図 6)。前方部の取り付け部は幅 3 mで、先端は 4 mである。前方部が細く、先端がバチ形に開く形態を復元する。古墳築造にあたり、尾根周辺を削平して前方後円形に削り出し、その上に盛土を積み上げている。里道部や円丘部南西側の周囲に 3～5 cm程度の小石バラスがみられることから、これを葺石と想定している。また、埴輪の出土がないことから、埴輪は巡らされていなかった。

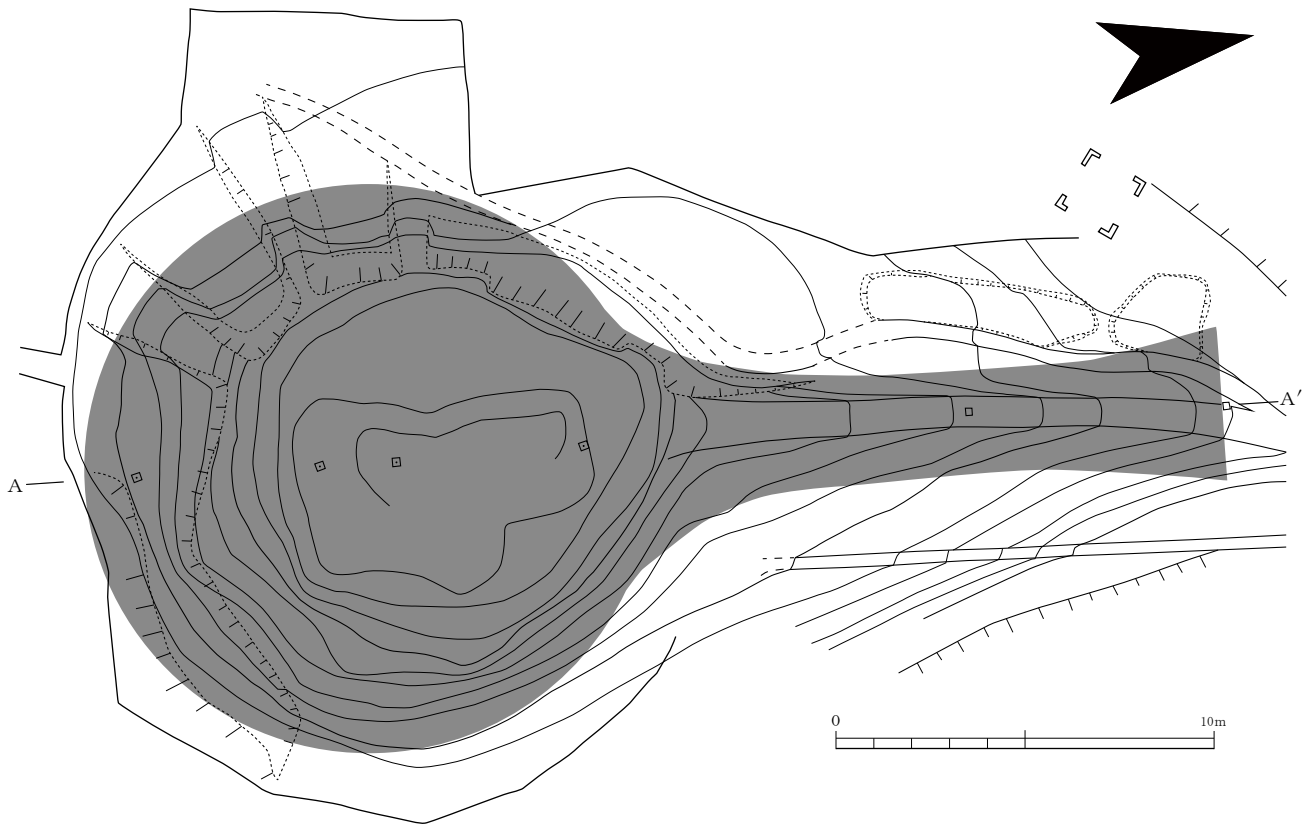


図6 朝来古墳 前方後円墳復元図 (1 : 200)

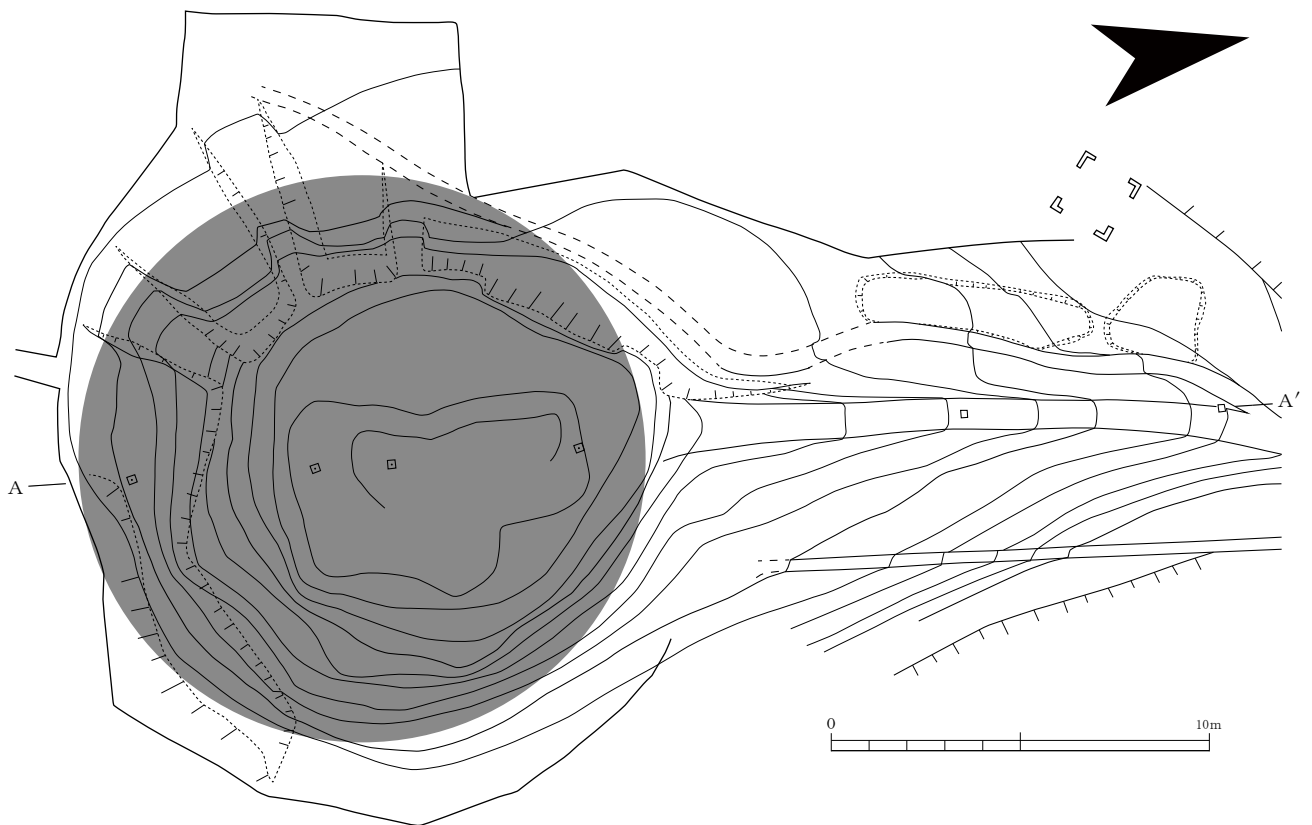


図7 朝来古墳 円墳復元図 (1 : 200)

たとした。さらに後世における改変箇所を考慮して、旧地形を復元し、後円部が高く、前方部先端がバチ形に開く想定復元案を提示した。古墳の年代は、出土遺物がないことから明確にはされていないが、①後円部径が前方部幅に比べて大きいこと、②後円部の高さが前方部よりも高いこと、③前方部先端がバチ形にひらくこと、④バラス敷の葺石がみられること、⑤埴輪はなさそうなことを根拠に、4世紀中頃の古式の前方後円墳とした（上富田町1988）。

しかし、この復元案においても課題が残されている。円丘部については、南部から西部にかけて、斜面部が一部崩落、あるいは後世の掘削が認められるが、比較的良好に残存している。特に、西側は平坦なテラス部から円丘部がたちあがる形状をしている。一方、前方部を復元した北側の里道部では、丘陵東側が湾曲しているのにあわせて、東斜面は急斜面となっている。水野氏は、これに合わせるように前方部東辺を推定しており、細い前方部がバチ形にひらく形状に復元する。しかし東斜面は急な傾斜になっており、前方部東裾の収まりが悪い。一方、里道の西側は、比較的広い平坦なテラス面が広がっており、中軸線を里道よりも西に振れば、復元は可能とはなる。この場合、里道西側の平坦面が、後世に削平され、前方部の大部分が残っていないとみなければならぬ。また、里道（稜線）を前方部の頂部にするには、円丘部に対しての非高差が大きい（復元では、これを根拠には古墳の年代を古くしている）。また、前方部先端を里道が屈曲する部分に復元するが、この部分に埴輪端を示すような掘り割りの痕跡はみられない。一方、葺き石と認識されたバラス敷であるが、葺き石に使用したバラスにしては、小ぶりの川原石である点が気になる。さらにバラスの残存する範囲は、里道上がもっとも密に残存しており、その両側は、里道から流れたようにも見える。さらに前方部の復元される範囲だけではなく、北方の里道上にもバラスが敷かれていることから、これらの小石は里道に敷かれたバラスであった可能性が高い。また、円丘部の南西の斜面のスロープ状になった所にもバラスが密に残存する。その残存状況から推測すると、円丘部の西から南の斜面にかけてバラスが敷かれたもので、その後、江戸時代後期に掘り込みが掘られ、結果的にスロープ部にのみバラスが残存したと推定される。これについては、古墳に伴うものの可能性もあるが、里道との関係では、後世に円丘を回り込むような通路状空間があった可能性もある。なお、円丘頂部にもバラスがみられるが、これは朝来経塚群・一字一石経塚に伴うものであろう。

また、今回の発掘調査は経塚の解明が主目的であったことから、経塚の面までしか調査ができておらず、その下層には及んでいない。よって、古墳に伴う盛土を確認していない。さらに、出土遺物に当該時期及び古代の遺物が確認できていないことも、課題として残る。

このように、前方後円墳の復元案については、まだ課題が多く残されているといえる。

B. 円 墳

上記から前方後円墳としてみた場合、課題点が多くあることがわかる。特に、前方部の復元に課題があることから、ここでは円墳の可能性も検討する。

この場合、直径15m、高さ2mの円墳と復元される。これは先の前方後円墳のうち、円丘部のみを古墳とした案である（図7）。この案では、先の地形や里道のバラスの理解については解消される。また、円丘部分は、北西から南面斜面部の損壊が大きいが高まりとして認識できる。スロープ上でのバラスについては、施工時期を特定できないものの、埴輪周りのバラス（葺石？）と理解することもできなくはない。

しかし、この案にも課題は残る。尾根上に古墳が造られた場合、尾根と埴輪の間を区画する掘り割りが掘削されるが、北側の里道との取り付け部には、それらしき痕跡はみられない。当然、

掘り割りが埋没して現地表面上に痕跡を残さないだけの可能性もある。また、円丘部の断ち割りが行われていないことから、古墳に伴う盛土については確認できていない。さらに、当該時期の出土遺物がみられないことも、円墳案を積極的に支持できない要素であることは間違いない。

このように、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』にもあるように円墳であるとする、その時期が問題となる。前方後円墳案では、埴輪が出土せず、その形状から古式の古墳であることが推定された。しかし、円墳になると、形状からの年代推定はできず、また、埴輪や土器の出土もないことから、6世紀代の古墳の可能性もあり、時期を特定できない。このような尾根上にある円墳であれば、同一尾根上にも複数の古墳が存在している可能性もある。しかし、この丘陵上を改めて踏査したが、古墳状隆起は確認できなかった。

このように、円墳の復元案にしても、課題が残されているといえる。

C. 経塚に伴う円丘

これまでの検討で、前方後円墳案にも、円墳案にも、課題が残されていることがわかる。では、そもそもこれが古墳であるのかについても検討してみたい。本遺跡が古墳の可能性が指摘されるのは、丘陵頂部に円丘状の高まりがあり、これが人工的なマウンドと推定するからである。さらに尾根上にある里道の取り付け状況や、その地形から前方後円墳であるとの推定もなされてきた。

しかし、今回の発掘調査は、経塚の解明を目的としており、これより下層については、断ち割り等の掘削をしていない。よって、古墳に伴う盛土も確認はしていない。また、円丘部には経塚や新しい掘削以外に、盗掘を受けた痕跡はみられず、埋葬施設も不明である。しかも円丘部と北側の里道（前方部）との比高差が大きく、古式の前方後円墳の特徴ではあるが、前方部端に掘り割りなどもみられない。また、葺石とされているバラスも里道上に多く敷かれており、推定される古墳よりも北方の里道にもみられることから、これも積極的な根拠とはならない。

これらの要因は、すべて朝来経塚群の下層の調査を実施していないことに起因し、調査目的からは逸脱するのしかたがなかった点である。ただし、今回の調査では、朝来経塚群や一字一石経塚にかかわる遺物の出土はあるものの、古代以前の遺物が出土していない。調査範囲が限られているとはいえ、当該期の遺物がないことは考慮する必要もある。つまり、古墳の墳丘ではなく、中世以降の経塚に伴って、尾根頂部をマウンド風に地山整形した可能性も残されている。

(4) 小 結

今回の報告では、測量・発掘調査及び踏査の結果について報告し、検討を加えてきた。「朝来古墳」としては、様々な可能性が指摘されるものの、現状では、いずれとも確定できない。現時点での情報では、確定できないので、ここでは前方後円墳・円墳・経塚に伴う円丘案を併記して検討したが、いずれも可能性と課題が残される結果となった。これらの解決に向けては、「朝来古墳」の解明に向けての発掘調査が必要であり、その成果によっては、上富田町の歴史を理解するうえで、大きな指針となるのであろう。今後、発掘調査と研究の進捗に期待したい。

(則包遥菜・相原嘉之)

第2節 朝来経塚群

(1) 発掘調査の概要

円丘部上には、町史編纂時の発掘調査によって7基の円形の石組み遺構が確認されており、付近からは東播系須恵器甕などが確認されている(図8)。7基の石組み遺構の配置として、最も円丘上中央に近い位置に3基が南北方向に並んでいる。この3基の東側に、これに隣接する形で2基が東西方向に並んでいる。さらに東側に2基が造られているが、この2基は1基ずつ少し離れて造られている。

それぞれの石組み遺構の概要について述べる。1から3号石組みは南北約250cm、東西約75cmの範囲に広がる。1号石組み(経塚)は、南北、東西ともに55cmの穴を穿つが楕円で、最大76cmを測る。深さは20.6cmである。2号石組み(経塚)は、南北、東西ともに64cmのほぼ円形で、やや歪む箇所での最大径は73cmである。深さは9.7cmである。3号石組み(経塚)は、南北93cm、東西71cmで最大径103cm、遺構の深さは20.9cmである。1から3号は石組み周囲の石が10～15cm程で、内部にさらに小さな石を詰めている。

つぎに、4号、5号は、南北70cm、東西125cmの範囲に広がる。4号石組み(経塚)は、南北55cm、東西56cmの円形の石室をもち、深さは38.6cmである。5号石組み(経塚)は、南北52cm、東西40cmの円形の石組みで、深さは16.5cmである。4号、5号石組み(経塚)は、概ね8～15cmの石を用いて円形の石組みを造っている。

最後に、規則的に配置された先の石組み遺構とはやや離れる2基であるが、6号石組み(経塚)は南北39cm、東西47cmの円形の石組み遺構で、深さは18.0cmある。石組み遺構の内部に長径28cm程の石がやや平坦な石が確認されており、2023年に実施した補足調査時にも残存していた。7号石組み(経塚)は、南北45cm、東西43cmの円形の石組み遺構である。7号石組み(経塚)には、南北45cm、東西43cmの円形石室で、深さは20.1cmである。6号・7号石組みは、概ね8～17cmの石を用いて石室を造っている。石を除いて、遺構間の距離は5号石組みから6号石組みまでは44cm離れ、6号石組みから7号石組みまでは26cm離れる。

(2) 町史編纂に伴う調査時の解釈

上富田町史編纂に伴う発掘調査時には、7基の石組み遺構について火葬墓としての解釈がなされた。上富田町史では、14世紀頃と考えられた甕の発見などから、円丘上が鎌倉時代に村の有力者の墓地となったと想定された。その後、16世紀後半に平らに削平されて石組み墓が造られたと想定された。

それぞれの石組みについて町史による調査時の解釈を確認する。まず、円丘上中央で南北方向に配置された3基について、円丘上が削平されたのちに南北2.5m、東西1.1mの範囲を石で囲み、内部を3区画に分けた墓であると解釈された。縁石にはやや大きめの石を用いて並べて、3区画に分ける境石にもやや大きめの石を使っているとされ、それぞれの石組み内には小形の石を入れているとされた。

つぎに先の3基に隣接する形の2基については、東西1.3m、南北1mの石組みの内部を石列によって2区画に分けられていると解釈された。さらに、東側に所在する2基については、75cm四方の粗い石組で、1基ずつ不規則な配置で造られていることから江戸時代に入る時期から17世紀初め頃の墓であると想定された(水野1992)。

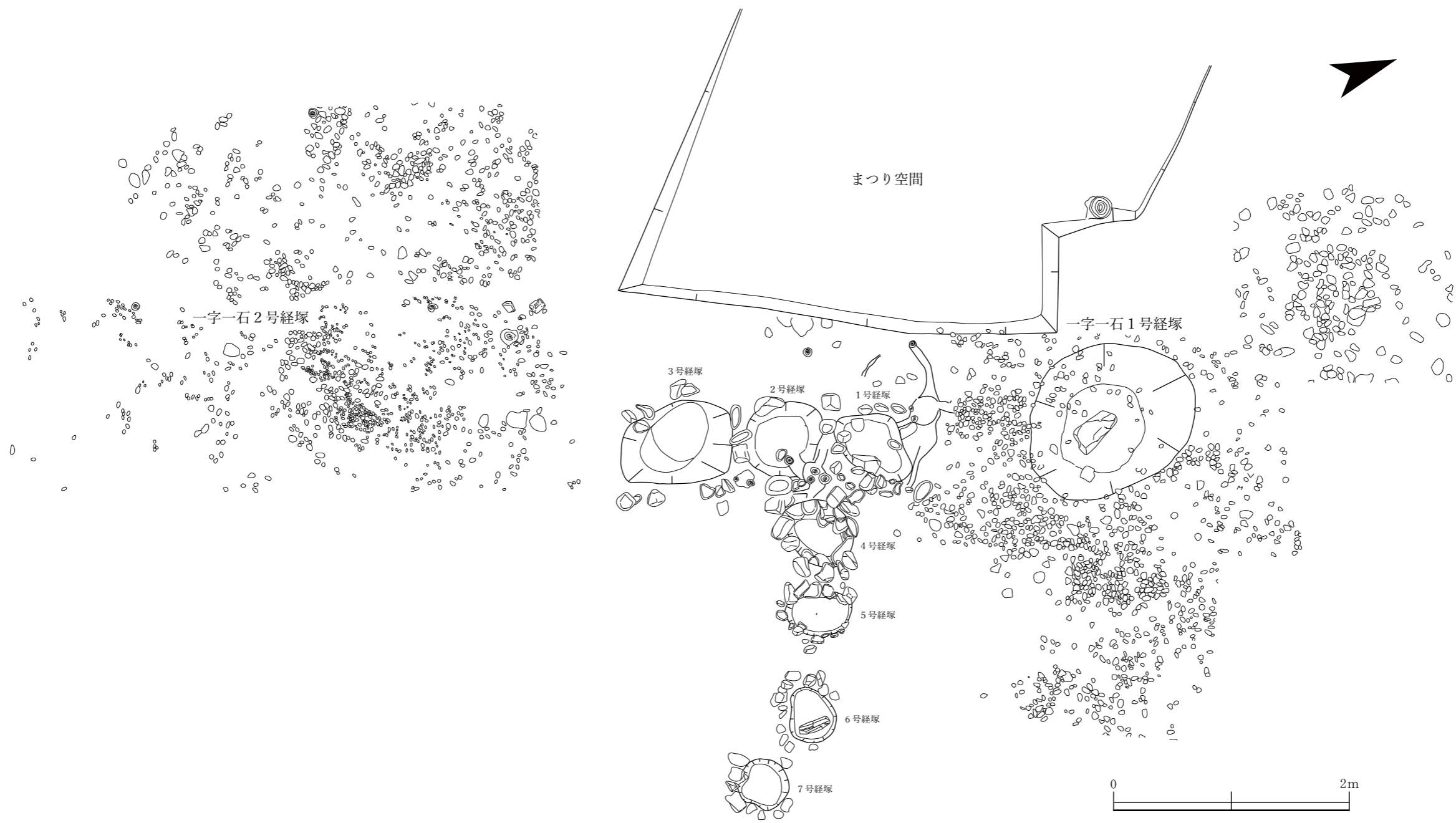


図8 円丘上遺構図 (1:40)

(3) 経塚遺構

上富田町史編纂時に石組墓とされた遺構については、当時の解釈では、いくつかの課題点が生じたことから再検討を行った。

従来の解釈による課題点と遺構の新たな解釈について述べる。第1の課題は立地の問題である。本遺跡は、小高い山の山頂付近に造営されている。このような立地に中世墓を造営した事例は少なく、中世墓以外の遺構であることが考えられる³⁾。中世墓であるとの評価が難しい一方で、先学に経塚が造営される場所の立地として挙げられるのは、寺社の境内(関係地)、聖地・霊地、墳墓の周辺、見晴らしの良い丘陵地などで、何らかの意味を持つ場所が選ばれたとされる(三宅1977)。立地の面からは、中世墓よりも経塚である可能性が高いといえる。

第2に石組み自体の課題である。町史では、石で囲った範囲のなかを境石で分けていたとされたが、実際にはそれぞれ独立した丁寧な石室を拵えている。円形に石を組み、さらに小さな石を詰めた石室(以下石室と呼称する)ともいべき類のものである。こちらも中世墓よりも寧ろ経塚にみられる事例である。

また、第3に町史編纂時の調査においても内部から火葬骨は確認されていない。

以上のことから従来通りの火葬骨を納めた石組墓とすることは難しく、最終的に石組みが経塚遺構(石室)である可能性が極めて高いとの結論に至った。

(4) 遺構配置と円丘上の遺構

経塚は7基確認されており、それぞれが独立した円形の石組みによる石室を有している。遺構配置は、円丘の中央付近に南北に3基(1～3号経塚)が造られている。円丘中央に近く、石組み遺構も大きなことから、この3基が最も古く同時に造営されたと考えてよいであろう。この経塚の東に隣接する2基(4号、5号経塚)も隣接し、整然と並ぶことから2基が同時に造営されたようである。この2基は、1～3号経塚よりも石室が小さく、やはり先の3基とは同時ではなく、やや遅れて造営されたようである。さらに東の2基(6号、7号経塚)は、4号、5号経塚の列とも外れてやや離れる。1～3号経塚や4、5号経塚のように、隣接せず1基ずつ造営されていることから、さらに遅れて造営されたようである。

造営当初は塚状にするために現状よりも土を盛っていたことなどを想定すると、それぞれ特に接近する2～3基が同時に造営されたと考えられる。7基の経塚間の距離も近く、隣接する形でまとまって造営されていることから経塚群全体として大きな時期差はなく、比較的短期間に造営されたことが想定される。6号経塚の石室内には、長径28cm程の石が検出されているが、この石などを天井石や持送石などとして使用し、塚状にしていた可能性が考えられる。

この他に東播系須恵器の甕が発見され、発掘調査時に「土器だまり」と呼称された場所がある。この「土器だまり」の解釈については、複数の可能性が考えられる。ひとつは、経筒の外容器として使用されていたものが経塚の石室から廃棄された(流出した)可能性である。もうひとつの可能性は、「土器だまり」とした場所(南北に伸びる経塚の西側)にも経塚が伸びていた可能性である。「土器だまり」は、「まつり空間」とされる範囲の境の段差に係る位置に所在している。このことから「土器だまり」の時期よりも、「まつり空間」とされる場所が削平された時期が新しいことが想定される。さらに、町史の図に経石が広がると想定された範囲もかかることから、削平時期は一字一石経塚の造営された時期より後の可能性が考えられる。いずれにしても、この場所の削平はかなり新しいものであることが想定される。

(5) 近畿での類例と造営時期

朝来経塚群の類例を近畿に求め経塚であるとの解釈を補強し、その造営時期について述べたい。

まず、遺構配置については、蓮台寺滝ノ口経塚群（三重県伊勢市）の例に近似しているといえる。蓮台寺滝ノ口経塚群も朝来経塚群と同様に小高い山の頂部に造営され、規則的に並べられた石室をもつ経塚群である。また、経塚群の造営された場所も円丘状に成形されて、敷石・石列が認められる点も同様である。こうした事例からは、朝来経塚群の造営されている丘が経塚造営に伴い加工された可能性が考えられる。この蓮台寺滝ノ口経塚群の造営時期は、12世紀中葉から13世紀第3四半期とされている（伊勢市教育委員会1998）。

現状において、直接的に蓮台寺滝ノ口経塚群や伊勢地域の経塚との関係を示すことのできるものはないが、紀伊半島の両端に類似した経塚群造営形態が認められる大変興味深い事例といえる。

次に外容器として用いられた可能性が高い「土器だまり」の東播系須恵器甕と石室の類例について述べる。近畿で東播系須恵器甕を外容器として石室・石組みを有する経塚には、江ノ上1号、同4号経塚、大道寺経塚、一乗寺3号経塚、新宮山1号経塚、入佐山経塚がある。さらに、和歌山県下において東播系須恵器甕を外容器として使用する事例は、大藪経塚、高尾山2号経塚の例が認められる。加えて、和歌山県では比井王子神社経塚に石組みの石室が認められ、常滑焼の甕を外容器として使用している（巽・山本ほか1962）。こうした事例からは、町史編纂時の調査で発見されている常滑焼の破片の何れかは外容器である可能性を残す。

最後に本経塚群の造営時期について述べておきたい。石組みや石室をもつ経塚は、平安時代から鎌倉時代に多いことが指摘されている（三宅1977）。また、東播系須恵器甕等の出土遺物の示す時期や、類似した遺構をもつ蓮台寺滝ノ口経塚群の造営時期が、本経塚群の造営年代を決める要素となる。

以上のことを考慮すれば12世紀末から13世紀前葉が想定される時期に、朝来経塚群が造営されたと考えられる。遺構配置などから7基が一度に造営されたわけではないが2～3基ずつが一度に造営されたと考えられる。経塚が規則的に配置され経塚間の距離も極めて近いことから、上部を塚状にするためには、同時あるいは近い時期にこれらが造営されたと考えられる。

この経塚群が営まれた愛宕山は、何らかの聖地と認識されていた可能性が高いといえよう。今後のさらなる調査によって、愛宕山から新たな遺跡が発見される可能性も考えられる。上富田町は中辺路から熊野に向かうルート上であり、熊野信仰や熊野詣との関係も注目される。こうしたことから本経塚群は、中世の当地域を考えるうえで大変重要な遺跡である。また、上富田町で初めて確認された埋経の経塚であり、近畿の経塚でみても石室遺構の残存する極めて重要な経塚であるといえる。

（橋本侑大）

第3節 一字一石経塚

(1) 朝来経塚の発見

遺跡の発見は、1971年（昭和46）4月に朝来小学校の所在する丘陵付近（愛宕山）で、墨書礫や須恵器片など30数点を発見したことによる。採集遺物を上富田町文化財審議員であった玉置善春氏に鑑定を依頼し、同氏が上富田町教育委員会に届け出たことにより、その存在が知られることとなった（水野1992）。谷本氏の採集した墨書礫には、「仏」等の文字が記されていた。

発見された墨書礫は、川原石を用いて一石に一字を墨書した、いわゆる一字一石経である。その後、紀南文化財研究会や和歌山県文化財審議委員であった巽三郎氏の調査が行われた⁴⁾。

経塚の発見は、上富田町史編纂室にも報告され、上富田町史編纂室は奈良大学考古学研究室とともに1985年（昭和60）7月20日から同月末日までの期間において発掘調査を行った。

（2）一字一石経塚の遺構

朝来経塚群の発掘調査に伴い周囲の木を伐採したところ、円丘上に2基の一字一石経塚が確認された。2基の経塚の名称について、北側の経塚を1号、南側に位置する経塚を2号と呼称している。各経塚の一字一石経は、既に長い年月を経て周囲に散逸しており、北側の1号経塚は本来の径3.8m、南側の2号経塚は2.2mと想定されている。経塚の形態は、川原石に経を墨書した礫を積み上げる形であったとされた。上富田町史編纂室と奈良大学の調査時には、既に一字一石経の多くから文字が消失した状態であった。

これらの経塚について、調査者である水野正好氏は、上富田町史に、地中に埋納する形態ではないことや経字の粗さ、墨書礫の大きさが不揃いであることから造営時期を江戸時代末の18世紀代を想定した。さらに、これら2基の一字一石経塚が造営された目的について、1号経塚は石組墓への供養として、2号経塚は同時期に新たな墓碑を具えた墳丘西南裾に造営された墓地とその被葬者への供養であったと記していた。両経塚が近い時期の造営であった可能性や旧墓地供養、新墓地供養が行われた可能性も併せて指摘していた（水野1992）。

しかし、2023年に実施した補足調査時において、朝来経塚群付近から近世に圓鏡寺に降ろしたとされ、町史では墓碑とされた石塔が一字一石経塚に伴う石塔である可能性を確認した。この2基の石塔に関する詳細は次項に譲りたいが、寛政2年（1790）と文政6年（1823）の銘をもち、2基の一字一石経塚はこの年に造営された可能性が考えられる。町史によれば、朝来経塚群が所在する墳丘裾にある2～4カ所ほどの抉りこんだ場所に、この2基の石塔が建っていたと伝えられている（水野1992）。両石塔には、「六十六部 大乘妙典供養塔 日本廻国」、「大乘妙典六十六部日本廻国塔」などの銘文がみられる。本来であれば、六十六部廻国巡礼に伴う石塔である廻国供養塔に見られる銘文である。上富田町内における廻国供養関連したものでは、門垣（市ノ瀬）経塚において廻国供養の巡礼者が建てた一字一石経塚がみられるが、その他の経碑には、そのほとんどに「奉書写」などがみられる。

朝来の一字一石経塚に伴う可能性のある圓鏡寺に所在する両石塔では、ともに一般的に法華経を指す「大乘妙典」と記されている。朝来の一字一石経も法華経を書写しているようであることや、朝来経塚群付近から圓鏡寺に降ろされたとの伝承も含め、ここでは、この2基の経碑が本遺跡の一字一石経塚に伴う可能性を示しておきたい。現在において、伝承を含め詳細について検証を行うことは困難である。しかし、本経塚群に伴う経碑ではなかった場合においても上富田町内には1737年から1835年の年号が刻まれた礫石経塚に伴う経碑が残されており、本遺跡の2基の礫石経塚もこの時期を大きく外れることはないであろう。

上富田町史では、2基ともに石数は8万点程で法華経の字数に近いとの指摘がされているが、残存石数に8万に迫る数は確認できない。残存する石数からいえば、法華経の一部を記したものであったかもしれない。2023年に実施した現地での補足調査では、一字一石経と考えられる川原石が集積していることを確認したが、墨書の残存するものは発見できなかった。現状からみても町史編纂に伴う調査当時に水野氏が記したように、地面を深く掘り込んだりはせず、積み上げ

る形態で経石を安置したと考えるのが妥当であろう。

なお、朝来経塚群から出土した経石については、「一字一石経」の項において詳細を記すこととしたい。

(橋本侑大)

(3) 圓鏡寺の石塔

朝来経塚の所在する丘陵の裾部に位置する圓鏡寺には2基の石塔が安置されている(図9)。

宝篋印塔の六十六部廻国塔 六十六部廻国供養塔は、全国六十六か所を巡って、国々の霊場に書写した法華経を一部ずつ納め、諸願の成就を祈念する六十六部廻国供養の際に建てられる。室町時代に始まり、当初は僧侶が行っていたが、江戸時代になると僧でない者も仏像を納めた厨子を背負い諸国を巡回した。圓鏡寺に所在する両石塔とも六十六部廻国供養塔である。

本塔は圓鏡寺境内の観音堂西側に位置する、凝灰岩製の宝篋印塔である。切石積み二重基壇の上に反花座と請花座を設ける。相輪の高さ40.5cm、笠の高さ21.5cm、塔身14.5cm、基礎143.5cm、総高は220cm、幅26.5cm。月輪は薄肉彫りで少し浮き出ており、その中に南面は阿闍如来(ウーン)、西面は宝生如来(タラク)、北面は阿弥陀如来(キリク)、東面は不空成就仏(アク)と、金剛界四仏の梵字が平底彫りされる。

基礎側面と反花座側面に銘文が刻まれている。基礎正面(南面)には「大乘妙典供養塔 奉納 六十六部 日本廻国」、左面(西面)には「願以此功德 普及於一切 我等興衆生 皆共成仏道」、右面(東面)には「天下泰平 五穀成就 日月清明 諸縁吉利」、裏面(北面)には「文政六年癸未 当邑 嘉蔵 願主 ひで」とある。反花座正面には「生馬邑 長太夫 佐市 金屋 邑 和助 大内谷 新兵衛 市鹿野 八右衛門 利兵衛 冶左衛門 源蔵 長八 興次兵衛 彦右衛門」、左面には「石工市之瀬 小三郎 竹垣内 佐藤次 瀧邑 金吾」、右面には「當邑庄屋 六兵衛 同肝煎 常七 世話人 同 岩蔵 若山 助力 正山 下総州 全 好蔵」⁵⁾とある。上富田町史(史料編下)では基礎側面の銘文について、「左・右・裏の順で十字二行は法華経(化城喻品第七)からの偈文が刻まれ、八字二行、十六字は本塔造立の願文である。本塔の願主嘉蔵・ひで両人が、日本廻国の大業を文政六(1823)年に果たした。その記念に造立した廻国成就塔であるといえる。」(上富田町史編さん委員会1997)とされている。反花座の銘文については、願主たちに何らかの形で支援を行った者、結縁者の名前が記されていると推測できる。

角柱の廻国塔 本塔は砂岩製である。総高が52cm、幅が20cmで、正面と左右面に銘文が刻まれる。正面には「奉納大乘妙典六十六部日本廻国塔」、左面には「生馬村 林清太夫」、右面には「寛政二年戊正月十日」とある。本塔は町史に詳しい記述がないが、銘文から、生馬村の林清太という人物が寛政二(1790)年に日本廻国を果たした記念に築いたものと考えられる。

以上が圓鏡寺に安置されている石塔である。

1985(昭和60)年の上富田町史編纂に伴う調査で水野正好氏は、複合遺跡と考えられた朝来古墳の後円部西南裾に江戸時代後期の墓碑として建てられたと推測した。しかし、石塔に彫られた銘文と前項で述べた遺構の再検討から、2023年の調査では、一字一石経塚に伴う石塔である可能性を確認した。両塔ともに一般的に法華経を指す「大乘妙典」と記されており、朝来の一石一石経も法華経を書写しているようであることや、朝来経塚付近から圓鏡寺に降ろされたという伝承も含め、この2基の石塔が本遺跡の一字一石経塚に伴う可能性を提示しておきたい。

(植木実果子・松田青空)



宝篋印塔（南面）



角柱の廻国塔（正面）

図9 圓鏡寺の石塔

註

- (1) 『紀伊民報』1985年7月26日付
- (2) 『上富田の文化財』に掲載されている「朝来古墳について」の文章は、文頭の「経過」を除いて、1985年7月25日の調査委員会で報告された水野正好「朝来経塚の調査と成果－朝来古墳の発見－」と同文である。
- (3) 遺構の再評価については、狭川真一氏に御教示・御助言をいただいた。
- (4) 『紀伊民報』1972年5月15日付
- (5) 現地調査、過去の調査記録、『上富田町史 史料編下・二』、上富田町HP「上富田町文化財教室シリーズ上富田の石塔（その2）」<https://www.town.kamitonda.lg.jp/section/kami50y/kami50y05004.html>（2024年2月7日閲覧）を参考とした。

第4章 出土遺物

第1節 東播系須恵器

朝来経塚群付近からは、経塚の発見時から須恵器片が確認されている（図10～12）。また、朝来経塚群の須恵器片として『石川県立郷土資料館紀要』第14号（吉岡1985）にその一部が紹介されるなど、早くから一部が地表に露出して散逸していた状況がわかる。2023年に行った補足調査時点においても、須恵器片が散布している状況が確認された。須恵器片の散布が確認される場所は、町史編纂に伴う発掘調査で「土器だまり」と呼称された箇所のみ確認できる。この「土器だまり」付近の解釈は、既に第3章第2節において複数の可能性について提示した。これらの朝来経塚群周辺から出土した須恵器片は、綾杉文をもつことなどから東播系須恵器の甕であることが窺え、奈良大学に保管されていた記録には魚住窯で製作された可能性が記されている。

この東播系須恵器甕の破片は、色調が灰色で一部破片の外表面は灰白色を呈する。焼成は良好で、硬質を呈している。残存する破片の外表面調整から、上部が平行叩き、胴部に綾杉文叩き、下部は不規則な叩きによって成形されている。内表面はナデ調整を施しており、残存する破片に当て具の痕跡は確認されなかった。残存する個体は、すべて破片であり、小片を除いて実測可能な個体が34片と発掘調査当時の復元可能な口縁部附近の図面（1）が残されている。

朝来経塚群出土の東播系須恵器については、既に水野正好氏によって『上富田町史 史料編下』で14世紀初め頃の甕と想定されている（水野1992）。今回の再整理作業の過程において、この甕の時期について荻野繁春氏の編年を参考として再評価を行った（荻野1985）。荻野氏の分類では、甕は8種に分類されており、近畿地方の須恵器系陶器の編年は9期に分けられている。このうち本遺跡の円丘上出土のものは、口縁部形態や内面に当て具の痕跡を残さずナデ調整が施されること、叩き目などから甕Cであることが想定される。この甕Cは、荻野編年V期（12世紀末から13世紀中葉）に該当すると考えられる。口縁部に関しては、奈良大学に残された口縁部付近の実測図を参考に評価を行ったが、現在においては該当遺物の所在は不明である。

これまで、この甕は中世墓に伴う蔵骨器とされたが、遺構の評価に関する再検討に伴って、東播系須恵器甕の用途についても再検討を行った。本遺跡の東播系須恵器甕の用途として有力になるのは、経塚に伴う経筒外容器の可能性である。近畿の経塚において、東播系須恵器の甕を外容器に転用する事例は比較的多くみられる。和歌山県下においては、高尾山経塚（田辺市）、大藪経塚（かつらぎ町）などの事例が確認できる。経塚に転用される甕の時期は、編年のⅢ期（12世紀中葉）からV期（12世紀末から13世紀中葉）のものであり、和歌山県下においても同様である。このような類例から想定すれば、本経塚においても経筒外容器として使用されたと推定することが許されよう。

この甕が出土する「土器だまり」に既に削平された経塚があった可能性は否定できないが、この東播系須恵器が石組みの石室が残る経塚遺構から持ち出されたものの可能性について検証したい。本経塚群に伴う外容器と想定した場合に問題となるのは、甕が石組み遺構内に納まる量量であるかである。口径や型式を基に石組み遺構の幅との比較によって検証するが復元口径であることなどから精度に若干の問題が排除できないことについてはご容赦願いたい。

実測図の復元を参考にすれば、甕の口径は34.4cmである。これに荻原編年の甕Cで想定され

る体部の張りを考慮すれば、7基のなかで大形の遺構をもつ1号経塚から3号経塚の遺構内に納まることが想定される。しかし、現状の石組み遺構の深さに対して、甕の器高が高い。これについては、塚状にするため現状残存するよりも高く石組みが積み重ねられていたことが十分に想定される。つまり深さに関しては大きな問題にならず、十分に解決できると考えられる。

よって、前章までで報告した遺構の時期や東播系須恵器甕の法量からいえば、この甕が石組みの経塚遺構に伴う経筒外容器である可能性が考えられる。

(橋本侑大)

第2節 常滑焼

常滑大甕は円丘上を中心として出土しており、過去の報告では東播系須恵器と同様に14世紀初め頃の甕と想定されている(図13)。

1～3は常滑焼大甕の体部片である。外面には縦方向のケズリが見られ格子状の押印文が帯状に連続施文されている。内面は横方向のナデ調整である。4～7は頸部片である。8・9は肩部片である。4～9には、外面に自然釉の付着がみられる。

赤羽一郎、中野晴久両氏の編年を参考に再評価を行う(中野1995)。ただし、出土品は破片のみであるのに加え口縁部が未確認のため限られた情報から大まかな年代幅しか推定できないことを先に断っておく。

赤羽・中野生産地編年は、12世紀から16世紀までを大きく12型式に区分している。上記の常滑大甕をこの編年と照合すると肩部内面をナデて粘土紐の積み上げ痕を消していること、体部外面に格子状の押印文が帯状に連続施文されていることからおよそ2型式から5型式(12世紀第三四半期～13世紀中頃)のいずれかに収まるものと考えられる。生産時期と消費時期との時間差をどの程度考慮すべきか、その立証に係る証拠はないが先述した東播系須恵器の年代(12世紀末から13世紀中葉)と大きく外れることはないと思えることができよう。

この常滑大甕は、水野報告(水野1992)によれば14世紀初め頃の火葬した骨を納めた蔵骨器であると推測されていた。この他にも色調の異なる常滑焼の破片も確認されている。常滑大甕は主に経塚の外容器や蔵骨器としての用途があり、この度の再整理においても中世墓とされてきた石組み遺構が経塚である可能性が示された。そのため、本報告で図化した常滑大甕も経塚に埋納された外容器としての用途が想定される。しかしこれらの説は遺構が検出されていないことから可能性の提示にのみ留めて将来の調査の糧になることを願う。

(森山そらの)

表1 出土遺物観察表(1)

番号	図版 番号	器種	遺構 出土位置	口径 (cm)	残存高 (cm)	厚さ (cm)	焼成	胎土	色調	残存率	調整	備考
1	図10-1	東播系須恵器 甕 (口縁部)	採集	34.4	8.5	1.2	良好	やや密	暗黒灰色	口縁部 3/10	(外) 平行タタキ (内) ヨコナデ	所在 不明
2	図10-2	東播系須恵器 甕	表採		6.7	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
3	図10-3	東播系須恵器 甕	表採		5.1	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ、綾 杉紋タタキ (内) ヨコナデ	
4	図10-4	東播系須恵器 甕	表採		7.2	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
5	図10-5	東播系須恵器 甕	土器だまり B-1		8.2	1.3	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ、綾 杉紋タタキ (内) ナデ、ヨコナデ	
6	図10-6	東播系須恵器 甕	表採		13.4	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
7	図10-7	東播系須恵器 甕	テラス東部		5.6	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
8	図10-8	東播系須恵器 甕	テラス一括		5.4	0.6	良好	密	(外) N5/ 灰 (内) N6/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
9	図10-9	東播系須恵器 甕	テラス一括		4.1	0.6	良好	密	(外) N5/ 灰 (内) N6/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
10	図11-10	東播系須恵器 甕	表採		7.2	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ヨコナデ	
11	図11-11	東播系須恵器 甕	表採		7.2	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
12	図11-12	東播系須恵器 甕	テラス東部		9.5	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ、強いナデ	
13	図11-13	東播系須恵器 甕	テラス状 遺構下		7.0	0.8	良好	密	(外) N5/ 灰 (内) N6/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ、強いナデ	
14	図11-14	東播系須恵器 甕	テラス東部		8.1	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ヨコナデ、 強いヨコナデ	
15	図11-15	東播系須恵器 甕	テラス東部		8.7	0.5	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
16	図11-16	東播系須恵器 甕	表採		9.5	0.8	良好	密	N6/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
17	図11-17	東播系須恵器 甕	表採		6.9	0.9	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) 強いナデ	
18	図11-18	東播系須恵器 甕	表採		9.6	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) 強いヨコナデ	
19	図11-19	東播系須恵器 甕	表採		10.2	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) 強いヨコナデ	
20	図11-20	東播系須恵器 甕	表採		8.1	1.0	良好	密	(外) N7/ 灰白 (内) N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ヨコナデ	
21	図11-21	東播系須恵器 甕	表採		8.2	0.9	良好	密	N6/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
22	図11-22	東播系須恵器 甕	表採		5.7	0.9	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	

表2 出土遺物観察表(2)

23	図11-23	東播系須恵器 甕	表採		8.6	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ヨコナデ	
24	図11-24	東播系須恵器 甕	表採		9.1	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ヨコナデ	
25	図11-25	東播系須恵器 甕	表採		8.0	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
26	図11-26	東播系須恵器 甕	表土中 西テラス		10.1	0.7	良好	密	(外) N4/ 灰 (内) N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) 強いナデ	
27	図11-27	東播系須恵器 甕	テラス 東部		3.7	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ、指頭圧痕	
28	図11-28	東播系須恵器 甕	テラス 東部		4.6	0.6	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
29	図11-29	東播系須恵器 甕	テラス下 一括		4.6	0.8	良好	密	(外) N6/ 灰 (内) N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ヨコナデ	
30	図11-30	東播系須恵器 甕	表土下面 テラス		4.2	0.6	良好	密	(外) N6/ 灰 (内) N5/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
31	図12-31	東播系須恵器 甕	表採		13.8	0.7	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
32	図12-32	東播系須恵器 甕	表採		8.9	0.8	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ、 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
33	図12-33	東播系須恵器 甕	表採		10.7	0.9	良好	密	N6/ 灰	破片	(外) 綾杉紋タタキ (内) ナデ	
34	図12-34	東播系須恵器 甕	表採		8.2	0.9	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ (内) ナデ	
35	図12-35	東播系須恵器 甕	表採		11.8	0.9	良好	密	N5/ 灰	破片	(外) 平行タタキ、 綾杉紋タタキ (内) 強いヨコナデ	
36	図13-1	常滑焼 大甕	表採		28.5	1.3	やや 不良	密	(外) 10TR6/2 褐黄灰 (内) 7.5TR5/1 褐灰	破片	(外) タタキ、ナデ (内) ヨコナデ	常滑窯の タタキ目
37	図13-2	常滑焼 大甕	表採		22.6	1.5	やや 不良	密	10YR6/4 褐灰	破片	(外) 縦方向のナデ、 タタキ (内) ヨコナデ	常滑窯の タタキ目
38	図13-3	常滑焼 大甕	表採テラス 下一括		18.9	1.6	やや 不良	密	(外) 10TR6/2 褐黄灰 (内) 7.5TR6/2 褐灰	破片	(外) 縦方向のナデ、 タタキ後ナデ (内) ヨコナデ	
39	図13-4	常滑焼 甕	中世墓 (経塚) D区		4.1	1.6	良好	やや密	(外) 5Y3/2 オリーブ黒(釉) (内) 10YR4/1 褐灰	破片	(外) 緑釉 (内) ヨコナデ、 接合痕	
40	図13-5	常滑焼 甕	北側経塚		4.2	1.4	良好	密	(外) 5Y3/2 オリーブ黒(釉) (内) 5YR4/3 にぶい赤褐	破片	(外) 緑釉 (内) ヨコナデ、 接合痕	
41	図13-6	常滑焼 甕	石組み (経塚) 石組		2.6	1.3	良好	密	(外) 5Y3/2 オリーブ黒(釉) (内) 5YR4/3 にぶい赤褐	破片	(外) 緑釉 (内) ヨコナデ	
42	図13-7	常滑焼 甕	石組み (経塚) D区		3.3	1.5	良好	密	(外) 2.5Y5/1 黄灰(釉) (内) 4.5Y4/1 黄灰	破片	(外) 緑釉 (内) ナデ	
43	図13-8	常滑焼 甕	表採		4.6	1.4	良好	密	(外) 5Y3/2 オリーブ黒(釉) (内) 5YR4/3 にぶい赤褐	破片	(外) 緑釉、降灰 (内) ナデ、 横方向指頭圧痕	降灰塊 多し
44	図13-9	常滑焼 甕	表土下 西テラス		5.3	0.9	やや 良好	密	(外) 10YR4/2 灰黄褐(釉) (内) 7.5YR4/3 褐	破片	(外) 緑釉、ハクリ (内) ヨコナデ、 指頭圧痕	

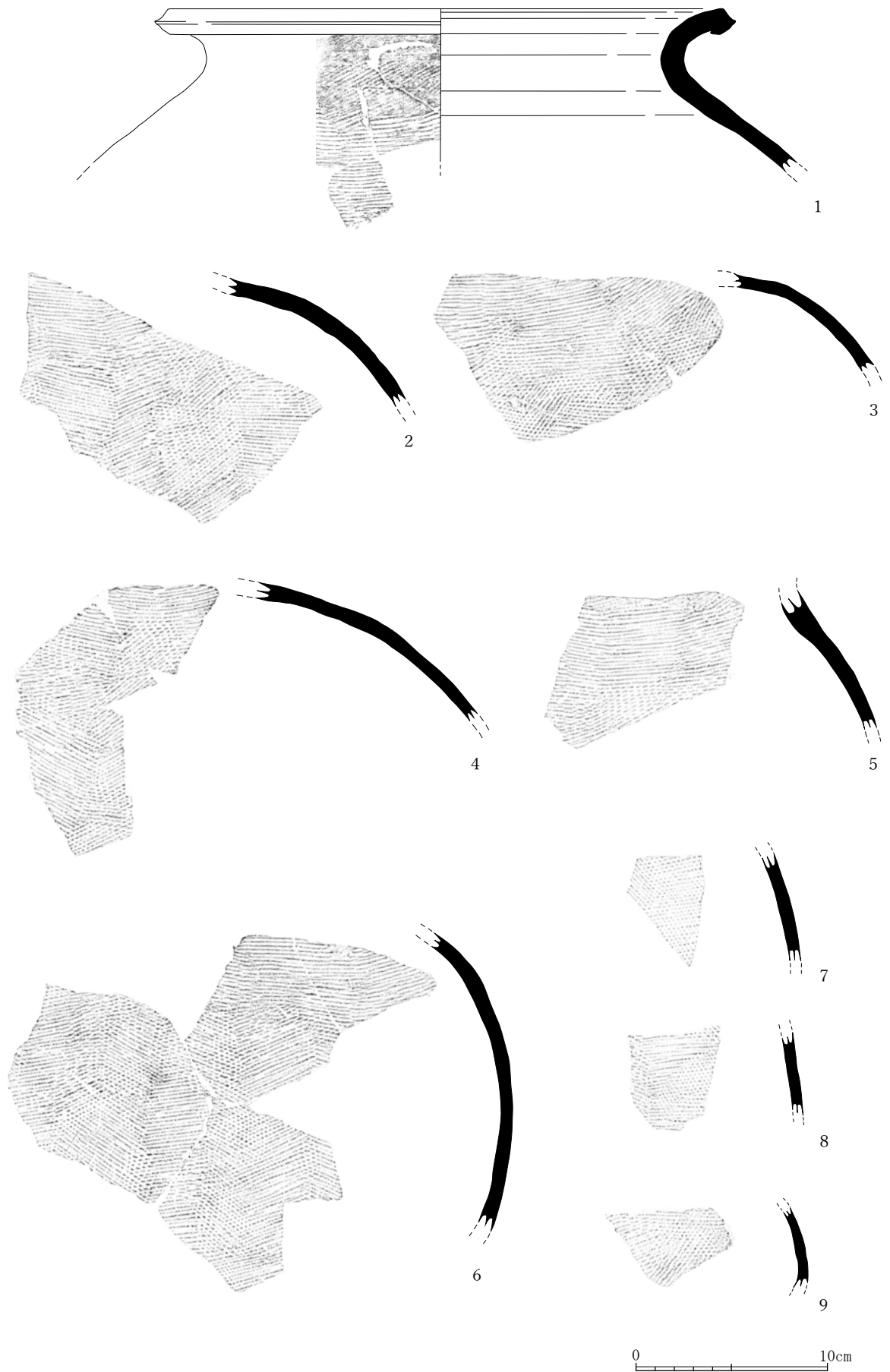


图 10 東播系須恵器甕実測図① (1:3)

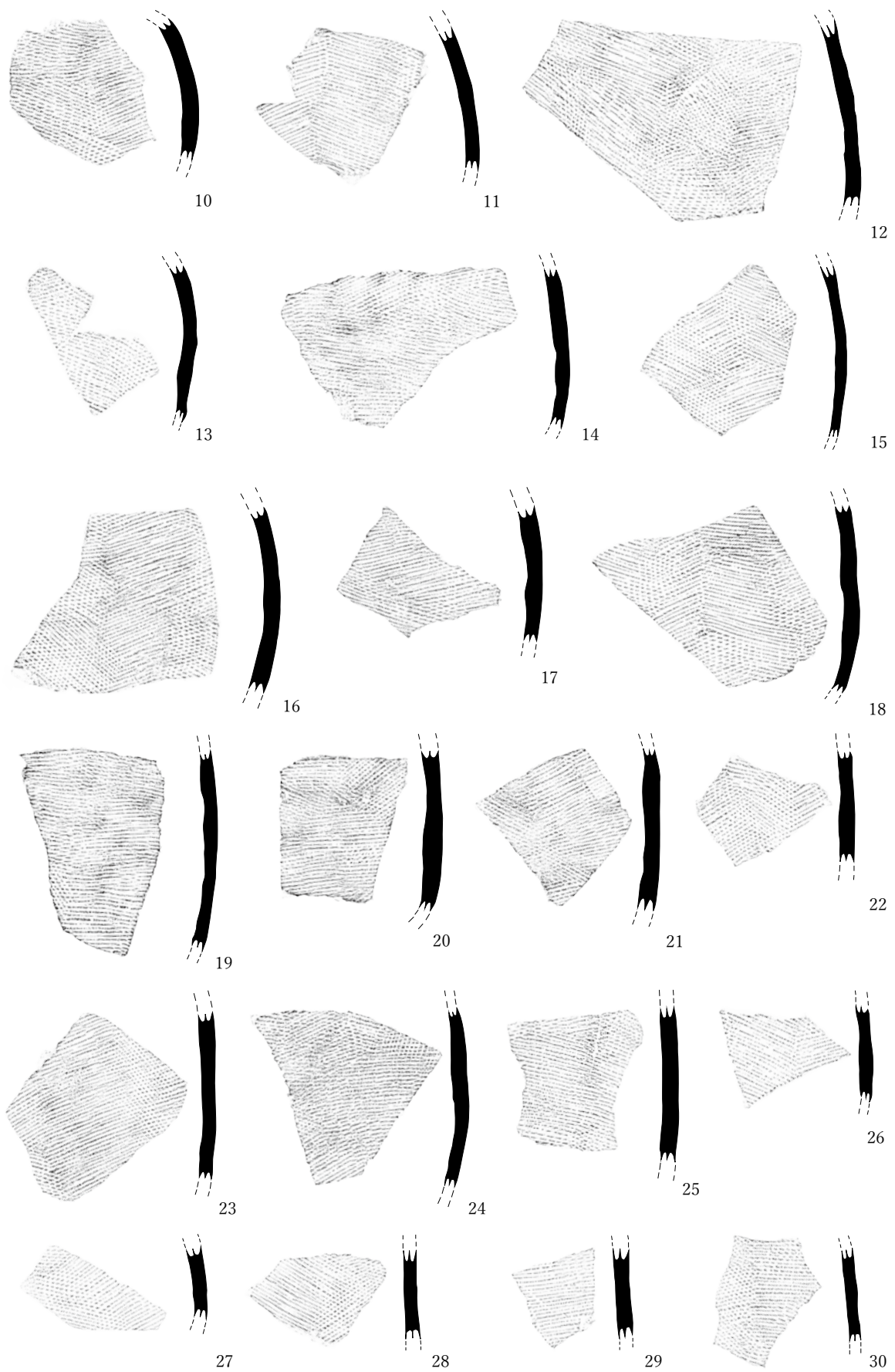


图 11 東播系須恵器甕実測図② (1:3)

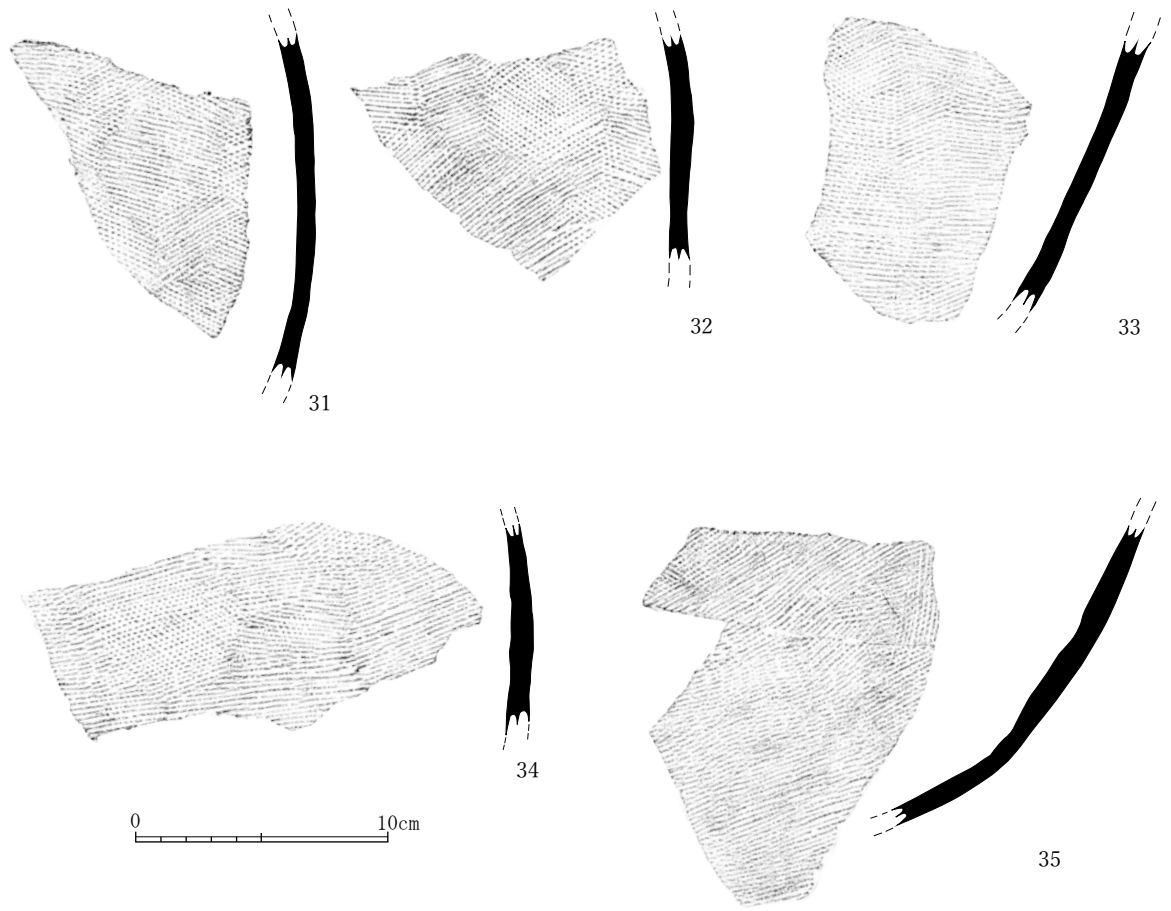


图 12 東播系須恵器甕実測図③ (1:3)

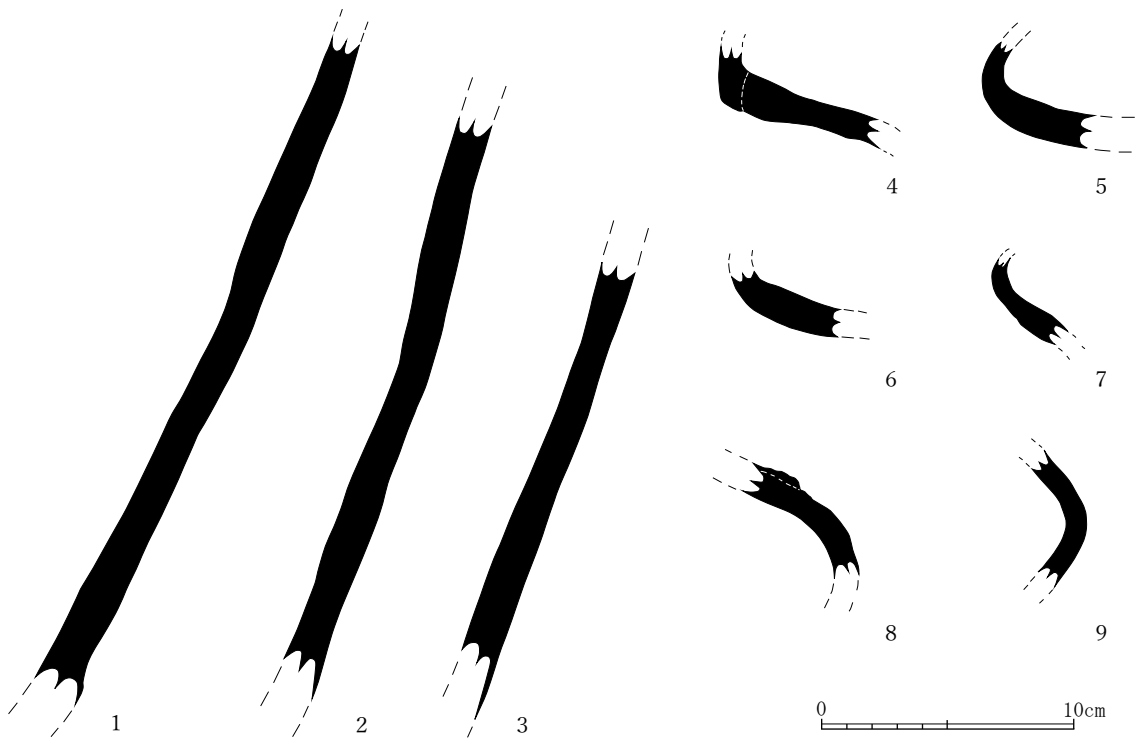


图 13 常滑焼実測図 (1:3)

第3節 一字一石経

(1) 一字一石経の概要

朝来経塚群の経石は、小形の川原石を用いて一石に一文字を書写した、いわゆる一字一石経である(図14～17)。書写された経典の種類は法華経であると考えられる。目視で文字が判読できるものでは、「者」「巖」「舎」などが確認でき、文字の判読ができないものでも墨書が確認できるものが複数残存している。

2023年(令和5)に実施した補足調査において、現地に経石と思われる川原石が残存している状況が確認できたことから経石の当初の詳細な石数は不明である。現地に残存していた、経石に文字(墨書)の残存は認められなかった。1971年(昭和46)に経塚が発見された当初から経石が持ち出されていたことから、一定数が散逸している可能性がある。奈良大学に保管されていた経石の数は794石であり、川原石の大きさは墨書の残存しているもので、概ね長径約6cmから3cm、短径約4.5cmから2cm程度であった。一字一石経に使用された川原石の一部には、縞模様をもつものがみられ、墨書との区別が難解な個体もみられる。

(2) 赤外線撮影による調査

前項記載の通り、朝来経塚の一字一石経は墨書が文字として判読できる残存するものが少数である。目視で文字として墨書されたことが確認できたのは、26石であった。このほかに微かに墨書の確認できる個体や、目視では文字として墨書されたものか、川原石自体の紋様であるかの判断が難解なものが複数存在する。こうした、問題を解決すべく、奈良大学において2023年(令和5)2月に赤外線撮影による経石の調査を実施した(図16・17)。赤外線調査は、本学文化財学科の杉山智昭准教授の御協力のもと、赤外線ライト(浜松ホトニクス社製HAMAMATSU IRLIGHT SOURCE C1385-2)照射下で、奈良大学設置の赤外線TVカメラ(浜松ホトニクス社製HAMAMATSU DIGITAL CAMARA C8800)を用いて撮影を実施した。調査対象は、奈良大学に保管されていた794石を対象とした。

調査方法は、1度に6石に対してスクリーニング調査を行い、スクリーニング調査によって墨書が存在する可能性がある経石を対象として、個別に詳細な赤外線撮影による調査を行った。赤外線撮影によって、薄く残る文字が鮮明に現れるといった効果が得られた。文字の一部のみ残存する文字が鮮明となり、文字の判読までは至らなくとも墨書の天地を特定するなどの有効性が認められた。

また、肉眼では墨書か川原石自体の紋様であるか判断が難解であった川原石についても、墨書のあったものと、川原石本来の石の紋様であったものに分類することができた。しかし、川原石自体の紋様と判断されたものについても、本来はその上に墨書があった可能性も否定できず、経石であった可能性自体を否定するものではない。

上富田町には礫石経塚が集中しており、本経塚も当地域の礫石経塚研究においてその一端を担う経塚といえる。

(橋本侑大)



图 14 一字一石經实测图① (1:2)

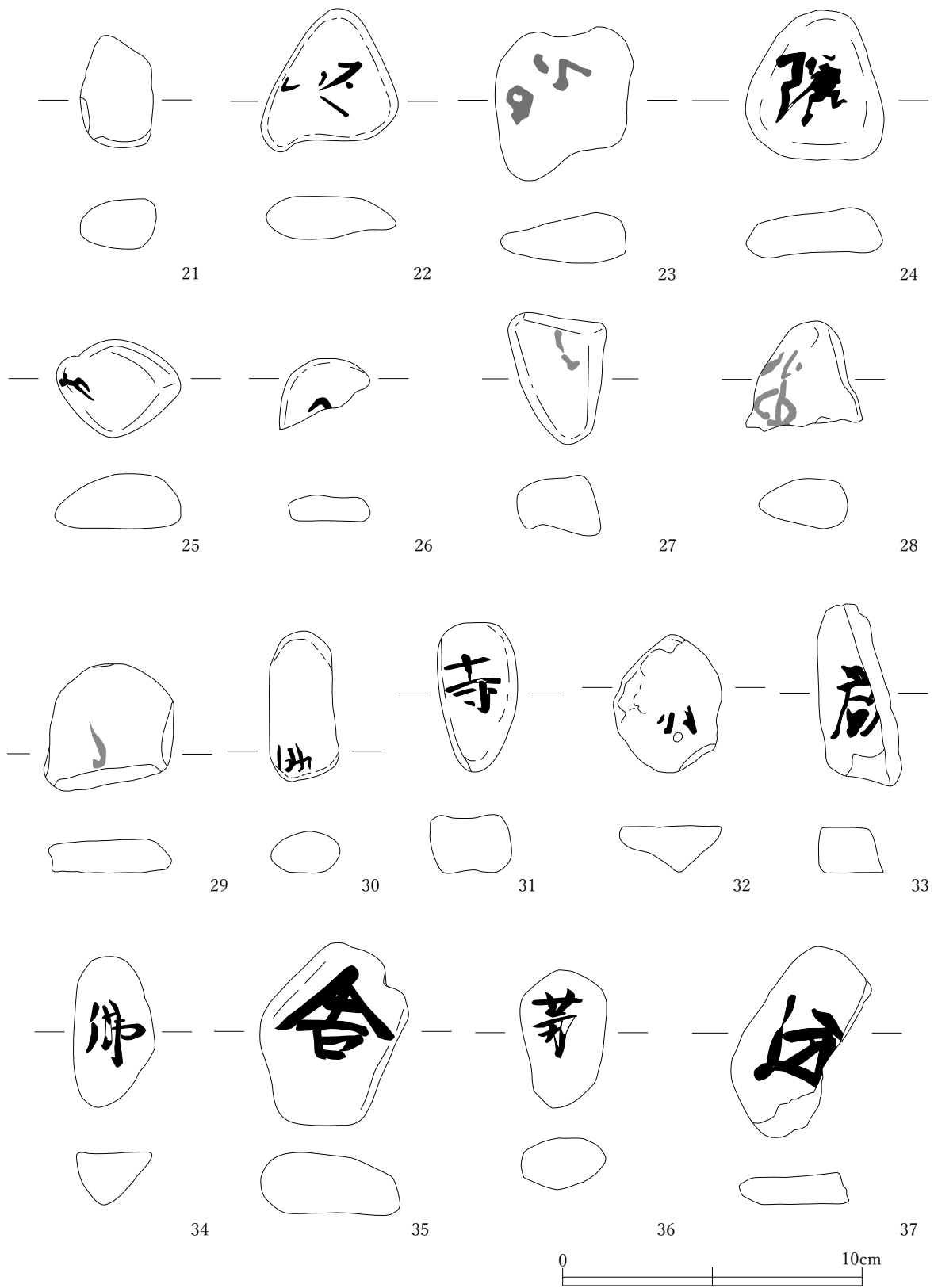


图 15 一字一石经实测图② (1:2)

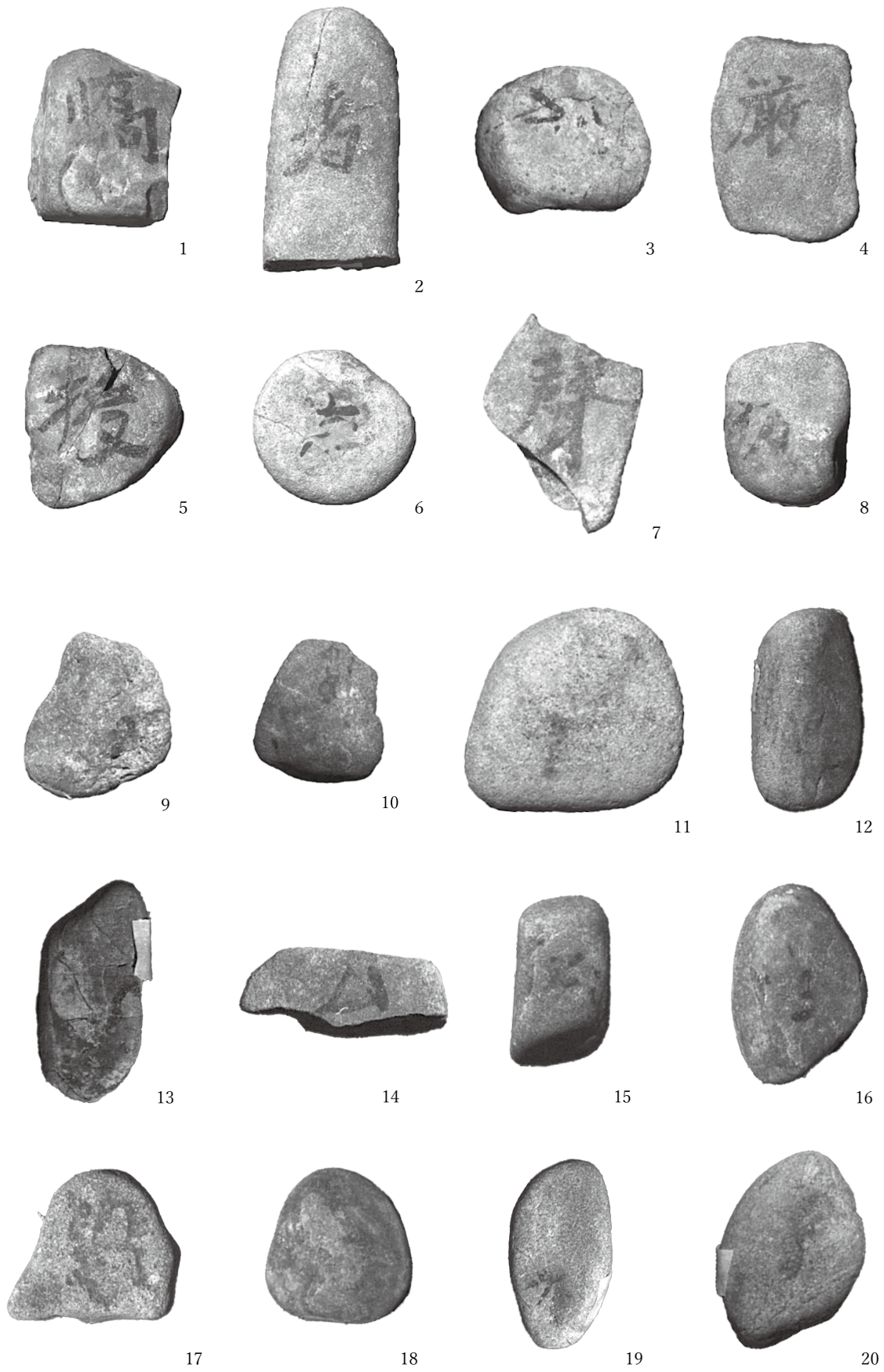


图 16 一字一石經赤外線撮影①

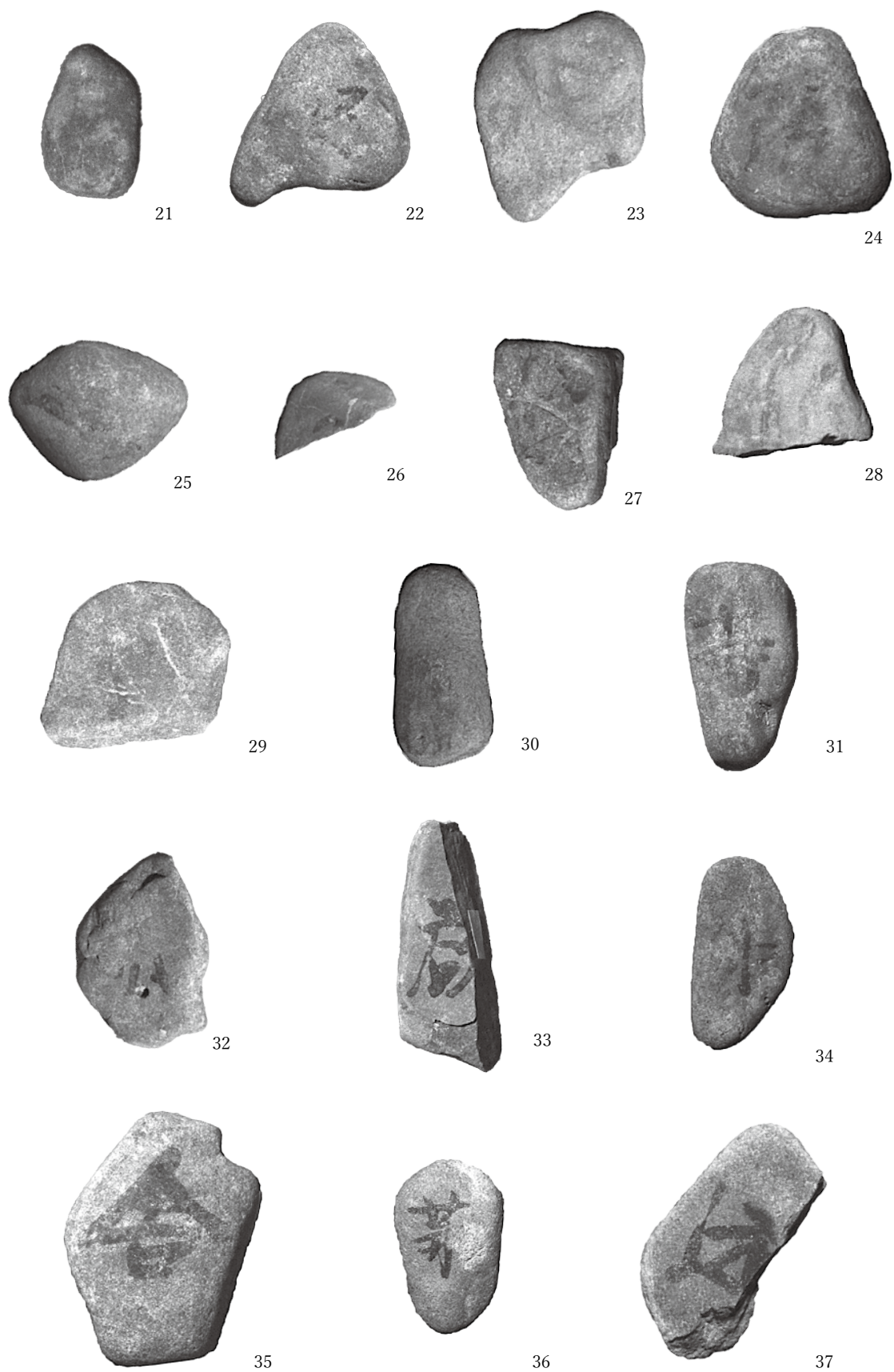


图 17 一字一石經赤外線撮影②

表3 一字一石経観察表

番号	図版番号	出土遺構	文字	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)
1	図 14 - 1	北部一字一石経塚	□	4.1	3.1	2.2
2	図 14 - 2	北部一字一石経塚	者	6.7	3.3	1.3
3	図 14 - 3	北部一字一石経塚	□	3.8	3.5	1.3
4	図 14 - 4	北部一字一石経塚	蔽	5.1	3.6	1.1
5	図 14 - 5	北部一字一石経塚	授?	4.0	3.9	1.4
6	図 14 - 6	北部一字一石経塚	□	4.2	4.0	1.3
7	図 14 - 7	北部一字一石経塚	□	4.3	3.8	1.1
8	図 14 - 8	北部一字一石経塚	□	4.1	3.1	1.6
9	図 14 - 9	北部一字一石経塚	□	4.3	3.8	2.3
10	図 14 - 10	北部一字一石経塚	□	3.9	3.2	1.6
11	図 14 - 11	北斜面	□	5.3	5.8	1.7
12	図 14 - 12	北斜面	□	5.0	2.8	1.7
13	図 14 - 13	北斜面	□	5.7	2.7	1.2
14	図 14 - 14	北部一字一石経塚	□	4.9	1.9	2.3
15	図 14 - 15	北部一字一石経塚	□	4.2	2.3	2.1
16	図 14 - 16	北部一字一石経塚	□	5.0	3.4	1.4
17	図 14 - 17	北部一字一石経塚	□	4.0	4.5	1.4
18	図 14 - 18	北部一字一石経塚	□	3.0	3.8	0.9
19	図 14 - 19	北部一字一石経塚	□	5.0	2.6	1.7
20	図 14 - 20	北部一字一石経塚	□	4.7	3.7	1.45
21	図 15 - 21	北部一字一石経塚	□	3.7	2.6	1.9
22	図 15 - 22	南斜面東側	□	4.8	4.6	1.4
23	図 15 - 23	南斜面東側	□	4.9	4.4	1.7
24	図 15 - 24	南斜面東側	□	5.0	4.6	1.5
25	図 15 - 25	南斜面東側	□	4.2	3.2	1.8
26	図 15 - 26	南斜面東側	□	3.1	2.3	0.8
27	図 15 - 27	南斜面東側	□	4.4	3.1	2.0
28	図 15 - 28	南斜面西	□	3.9	3.6	1.6
29	図 15 - 29	南斜面西	□	4.1	4.4	1.1
30	図 15 - 30	南斜面西	□	5.0	2.1	1.4
31	図 15 - 31	墳丘表面・集積部	寺 or 吉	5.0	2.6	1.9
32	図 15 - 32	北部一字一石経塚	□	4.6	3.4	1.5
33	図 15 - 33	北部一字一石経塚	□	6.1	2.4	1.5
34	図 15 - 34	表採	佛	7.0	2.7	1.8
35	図 15 - 35	表採	舎	6.0	5.0	1.7
36	図 15 - 36	表採	□	4.6	2.7	1.7
37	図 15 - 37	表採	迷?	6.5	4.8	1.1

第5章 総括

最後に上富田町史編纂に伴う調査の結果と再整理での検討結果を総合し、本書の総括としたい。

朝来古墳 朝来古墳の評価については、町史編纂に伴う調査で、水野正好氏の解釈によって4世紀中頃の前方後円墳と考えられてきた。しかし、4世紀の前方後円墳と考えるには課題も残されており、本書においては前方後円墳案、円墳案、経塚に伴う円丘（地山整形）案の3案を併記し、それぞれに一定の評価を下した。これら3案にもそれぞれに課題が残る結果となり、この円丘に関する解釈の確定については、今後の発掘調査による成果を待たねばならない。

朝来経塚群 町史で石組墓とされた7基の石組み遺構は、再検討の結果、石室をもつ経塚遺構であることが判明した。経塚遺構の類例や外容器の可能性が考えられる東播系須恵器甕の年代などから、12世紀末から13世紀中葉に造営された可能性があり、この7基の経塚に大きな時期差はないと考えられる。

また、「土器だまり」とされた付近には、2023年の現地補足調査においても東播系須恵器甕の破片が散布している状況を確認しており、今後のさらなる調査が期待される。

本経塚群は、上富田町で確認された初めての埋経の経塚であり、当該地域について考えるうえで重要な遺跡である。さらに、経塚研究においても石室が隣接し、規則的に配置された石室遺構の残存する極めて重要な経塚であるといえる。

一字一石経塚 円丘上に2基の一字一石経塚が確認され、北側の1号経塚は本来の径3.8m、南側の2号経塚は2.2mと想定されている。経塚の形態は、石を積み上げて安置したものであったとされた（水野1992）。その墨書礫は、小形の川原石を用いて1石に1文字を墨書していることが確認され、経典の種類は法華経である。既に、墨書の残存する石数は少数であったが、2023年に奈良大学において実施した赤外線撮影によって、肉眼では判読が困難な個体においても有効性が確認された。

また、再整理の過程で圓鏡寺に所在する石塔が、一字一石経塚に伴う経碑の可能性を確認した。

今後の課題 本書での報告は、発掘調査を行っていない朝来古墳を中心に課題が残る結果となった。朝来古墳（円丘）には併記した3案のそれぞれに課題が残る結果となり、この円丘に関する解釈の確定や、その整形時期については今後の発掘調査による成果を待たねばならない。また、「土器だまり」についても、現在でも東播系須恵器甕片が散布する状況が認められ、こちらについても今後の調査成果を待たなければならない。

朝来経塚群の発見によって、本遺跡が所在する朝来小学校付近の丘陵（愛宕山）が聖地として認識されていた可能性も高いといえ、今後のさらなる調査研究成果に期待したい。

（橋本侑大）

参考文献

- 伊勢市教育委員会（編）1998『蓮台寺滝ノ口経塚群』伊勢市文化財調査報告 8
- 稲垣晋也 1988「三重県伊勢市朝熊山経塚発掘ノート－経塚の構造と造営次第－」『MUSEUM』451
美術出版社
- 岩井顕彦 2013「山王古墳群の再検討－紀南の中期古墳の一例として－」『海の古墳を考えるⅢ－紀伊の
古代氏族と紀淡海峡周辺地域の古墳を考える－ 発表要旨集』第3回海の古墳を考える会
- 荻野繁春 1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第3号 福
井考古学会
- 上富田町教育委員会・奈良大学考古学研究室 1985『山王古墳－山王古墳群発掘調査報告書－』
- 上富田町教育委員会 1988「朝来古墳について」『上富田の文化財 第十六集』上富田文化の会
- 上富田町教育委員会（編）2021『山本氏関連城館群総合調査報告書－龍松山城跡、坂本付城跡発掘調
査報告書－』
- 上富田町史編さん委員会（編）1992『上富田町史』史料編下 上富田町
- 上富田町史編さん委員会（編）1997『上富田町史』史料編下・二 上富田町
- 上富田町史編さん委員会（編）1998『上富田町史』通史編 上富田町
- 狭川真一 2011『中世墓の考古学』高志書院
- 関秀夫 1990『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版
- 巽三郎・山本賢ほか 1962「紀伊国比井経塚遺跡発掘調査概報」『熊野路考古』1 南紀考古同好会
- 東京都品川区教育委員会（編）1983『品川区史料（二）庚申塔・念仏供養塔・回国供養塔・馬頭観世
音供養塔・地藏供養塔・道標』
- 中野晴久 1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
- 三浦基 1992a「興禅寺の経塚」『上富田町史』史料編下 上富田町
- 三浦基 1992b「その他の主要経塚」『上富田町史』史料編下 上富田町
- 水野正好 1985『紀南の古代を語る－富田川流域を中心に－』（講演会資料）上富田町教育委員会 1985
年7月29日
- 水野正好 1992「朝来経塚とその発掘調査」『上富田町史』史料編下 上富田町
- 三宅敏之 1977「遺跡と遺構」『新版 仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚 雄山閣出版
- 村木二郎 1998「近畿の経塚」『史林』81巻2号 史学研究会
- 吉岡康暢 1985「経外容器からみた初期中世陶器の地域相－須恵器系中世陶器を中心に－」『石川県立郷
土資料館 紀要』第14号 石川県立郷土資料館
- 和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』和歌山県地理情報システム（2023年5月
17日閲覧）
- 和歌山県史編さん委員会（編）1994『和歌山県史 原始・古代』和歌山県
- 和歌山県文化財研究会 1987『市ノ瀬遺跡発掘調査概報』



朝来経塚群遠望



朝来経塚群円丘上遺構（南から）

図版2



発掘調査前の経塚群（東から）



円丘上の発掘状況（北から）



経塚群完掘状況（南から）



4～7号経塚（南から）



1号経塚（東から）



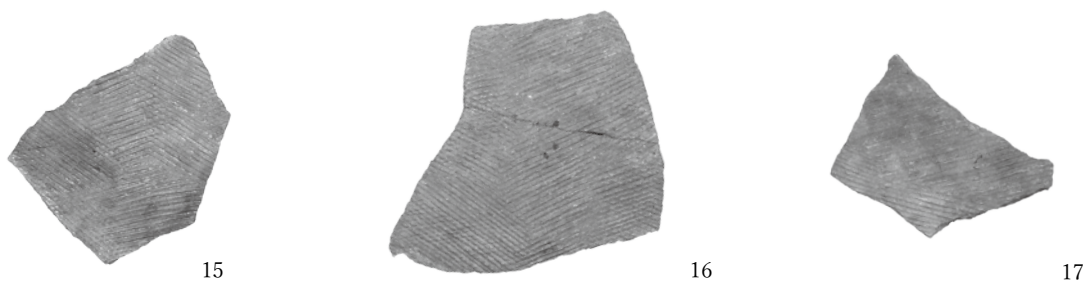
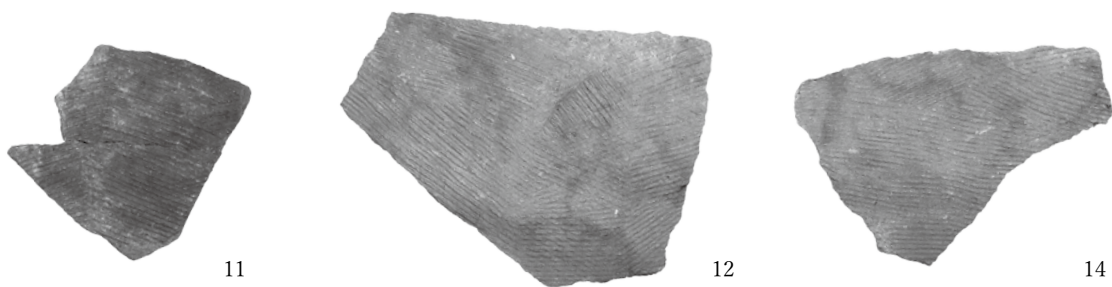
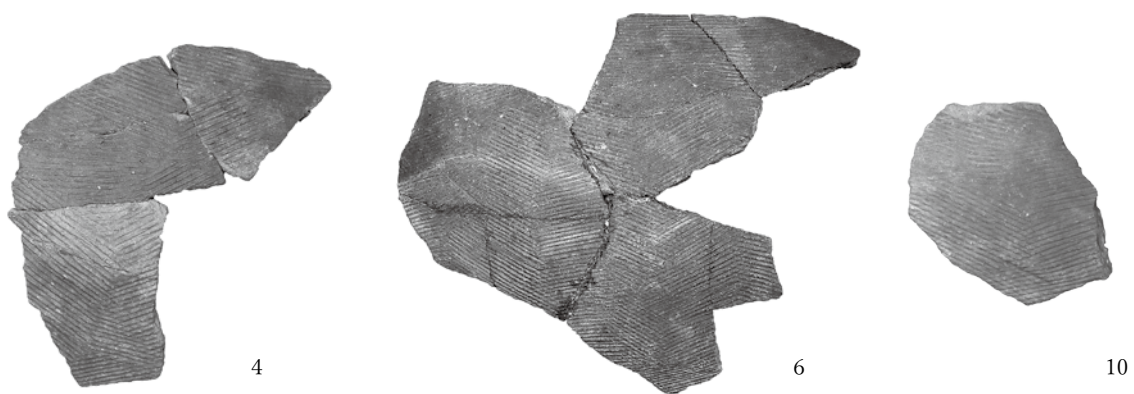
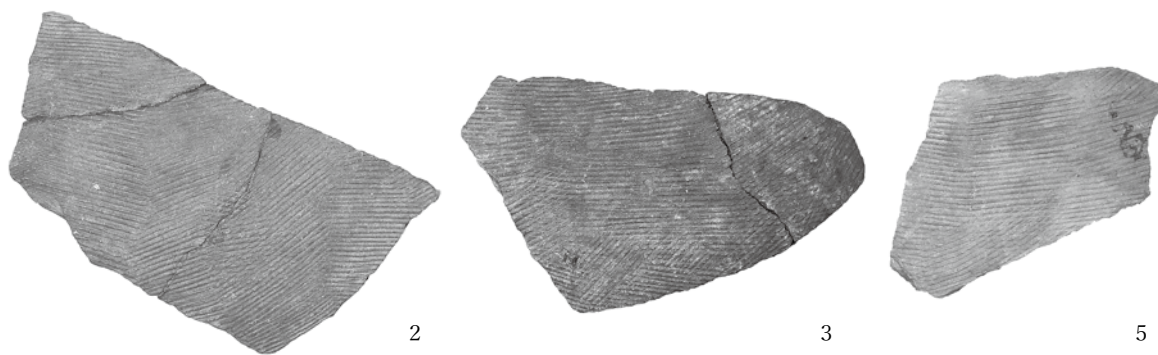
4号経塚（南から）



6号経塚（南から）

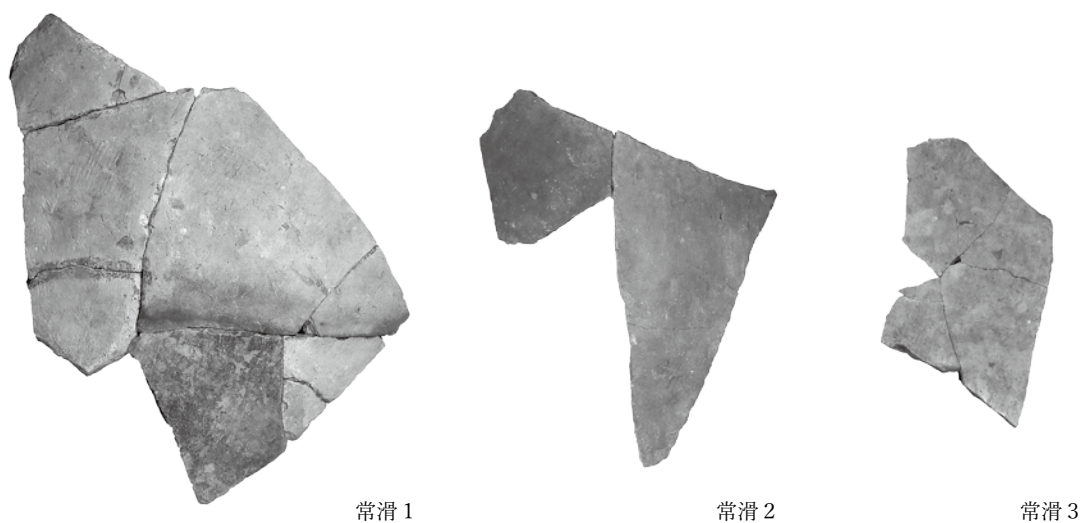
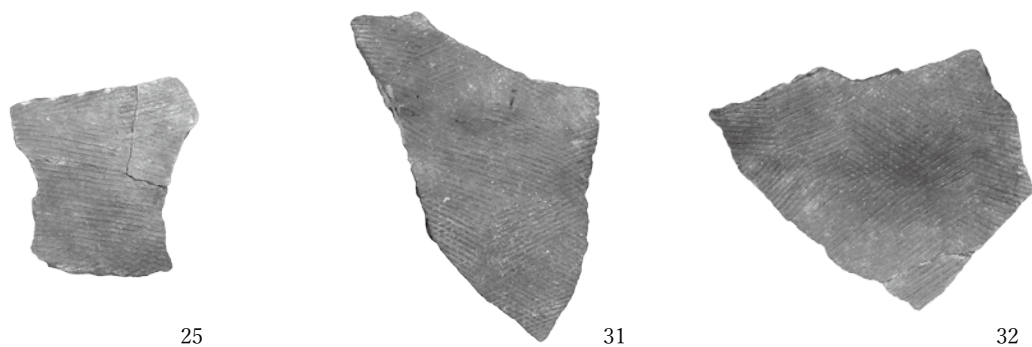
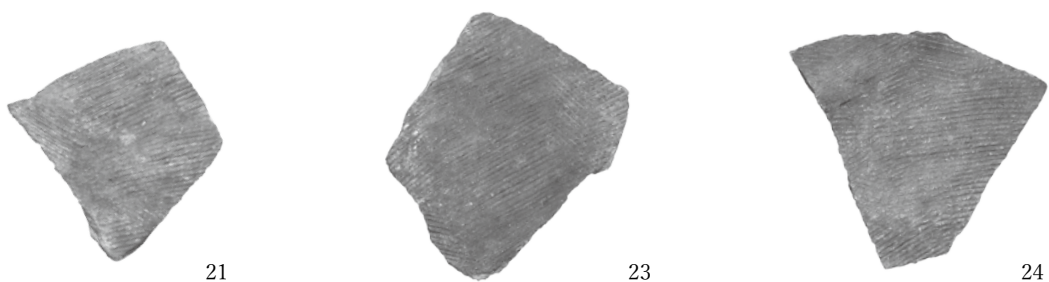


一字一石経散布状況（南から）

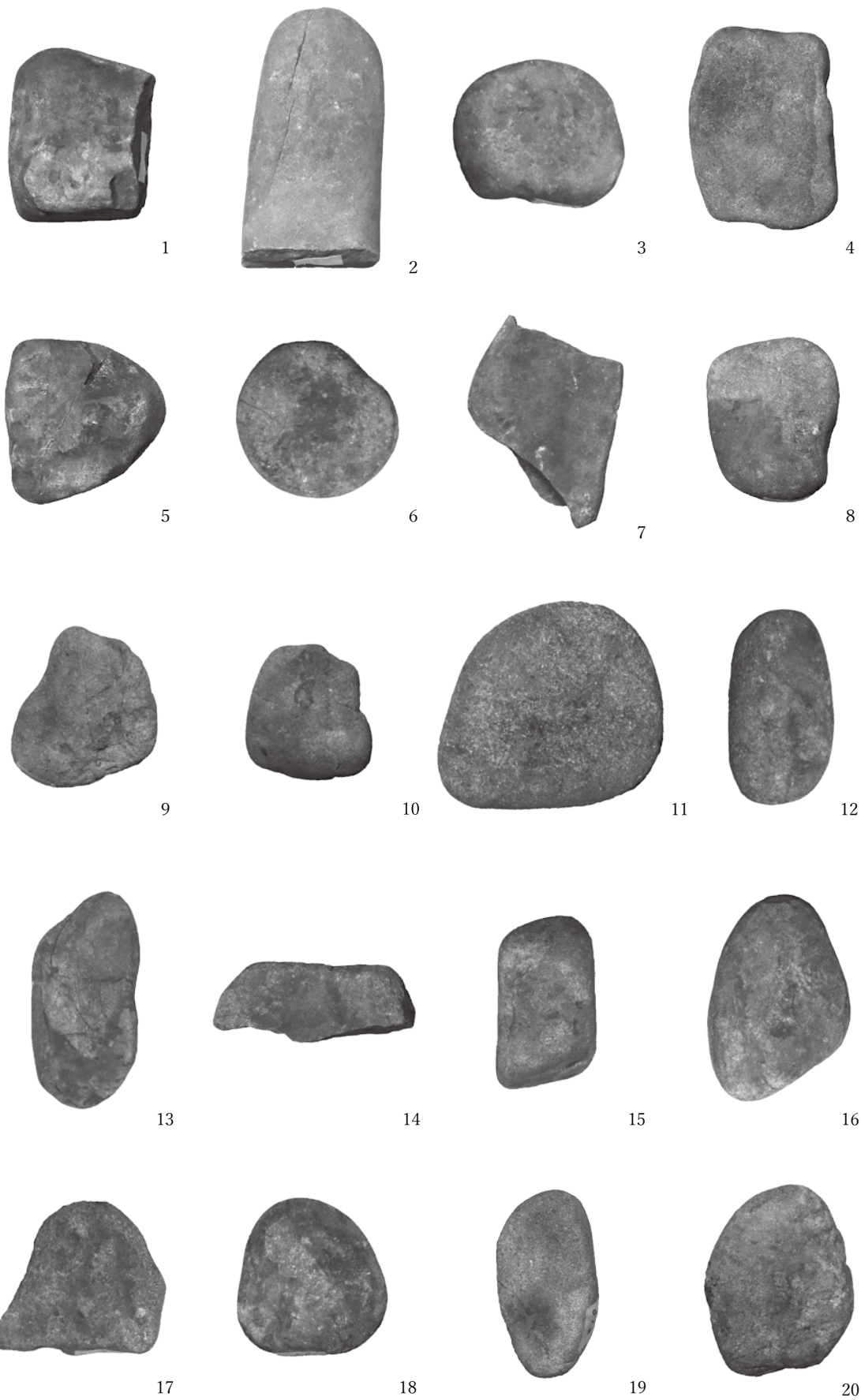


東播系須恵器甕 (1)

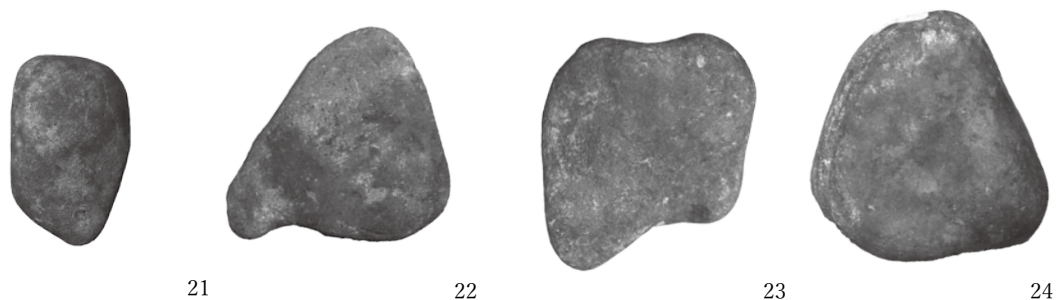
図版4



東播系須恵器甕(2)・常滑焼大甕



図版 6



報告書抄録

ふりがな	あっそきょうづかぐんはつかつちょうさほうこくしよ				
書名	朝来経塚群発掘調査報告書				
副書名	和歌山県上富田町における経塚・古墳の調査				
シリーズ名	奈良大学考古学研究調査報告書				
シリーズ番号	第30冊				
編著者名	相原嘉之、橋本侑大、森山そらの、後藤弘一朗、松田青空、植木実果子、則包遥菜 (編集：橋本侑大)				
発行機関	奈良大学文学部文化財学科				
所在地	〒631-8502 奈良県奈良市山陵町 1500				
発行年月日	2024年(令和6)3月26日				
所収遺跡名	所在地			コード	
				市町村	遺跡番号
朝来経塚群	和歌山県西牟婁郡上富田町朝来 1061 ほか			304042	23 上富田町 18・37
北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
33度41分49秒	135度25分19秒	19850720～19850730(発掘調査) 20230315～20230317(補足調査)		550 m ²	町史編纂に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝来古墳 朝来経塚群	古墳 経塚	古墳時代 鎌倉時代 江戸時代	古墳 経塚 一字一石経塚	東播系須恵器 常滑焼大甕 一字一石経	7基の石組み遺構をもつ 経塚群と2基の一字一石 経塚を確認した。

朝来経塚群発掘調査報告書

—和歌山県上富田町における経塚・古墳の調査—

2024年(令和6)3月26日

編集 奈良大学文学部文化財学科

発行 奈良大学文学部文化財学科
〒631-8502 奈良市山陵町 1500

印刷 共同精版印刷株式会社

佛